
オリ設定だらけのアルビオン王国を魔改造

匿名希望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オリ設定だらけのアルビオン王国を魔改造

【Nコード】

N4852Q

【作者名】

匿名希望

【あらすじ】

浮遊大陸ってどんな感じ？ という妄想の果てに生まれたテンプレなチート転生最強オリ主による『ゼロの使い魔』の内政系（政治系？）SS。オリジナル設定と御都合主義がてんこもり。毎週日曜日更新

簡易登場人物リスト／転生編&悪魔騒動編（前書き）

「悪魔騒動編」開始時点での登場キャラ名と年齢をサクッとまとめておきました。ついでに原作に登場するアルビオン関係の人間も可能な限り、この時点で何歳なのか、まとめてあります。

なお「・」はオリキャラ、「」は原作キャラですが、原作キャラの名前や年齢も一部勝手に捏造しています。ご了承下さい。

簡易登場人物リスト／転生編&悪魔騒動編

ジャーウッド男爵家（ウッドワード家）

・家長：ロビン・ウッドワード（29歳／父上。“沈黙”。天然チートその1）

・正妻：エレナ・ウッドワード（32歳／母上。“百枚舌”。天然チートその2）

・長子：アーサー・ウッドワード（5歳／主人公）

・家人：ブロス（60歳／執事・侍従長）

コートス（26歳／侍従）

アイリス（21歳／侍女）

エマン・ブラウン（42歳／侍女補）

サウスゴータ侯爵家（アジャン家）

家長：クロード・アジャン（35歳）

・正妻：故人

長子：マチルダ・アジャン（10歳）

アルビオン王家（テューダー家）

国王：ジェームズ1世（62歳／アルビオン3王子の長男）

・王妃：マーガレット・テューダー（42歳）

王子：ウェールズ・テューダー（5歳）

モード大公家（テューダー家）

家長：ジョージ・テューダー（56歳／アルビオン3王子の三男）

・正妻：故人

愛妾：シャジャル（25歳）

妾子：ティファニア（3歳）

その他のアルビオン貴族

正竜頭派

・フェスタ侯爵ガイ・ベステン（51歳）

アルビオン王軍

ランベル伯爵ホーキンス・ブレット（62歳）

サー・ヘンリ・ボーウッド（21歳）

アルビオン竜騎士団

・ジェリド伯爵ジークフリード・マイセン（18歳／“驚眼”）

おまけ

トリステイン王家

国王：ライル13世（51歳／元ライル・テューダー、アルビオン3王子の次男）

王妃：マリアヌ・ド・トリステイン（32歳）

王女：アンリエッタ・ド・トリステイン（3歳）

ラ・ヴァリエール侯爵家

家長：ラ・ヴァリエール公爵（39歳／本名どうしよっ……ハハ；

）

正妻：カリーヌ・デジレ・ド・マイヤール（33歳／天然チート最高峰）

長女：エレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール（14歳）

次女：カトレア・イヴェット・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール（11歳）

三女：ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール（3歳）

エレオノールとカトリアにはまだ領地分け等が行われていません

第1話 これがテンプレ転生ってやつか（前書き）

2010年02月23日 誤字修正・一部推敲

2010年02月26日 内容補足（主人公を転生させた神様に
ついて）

第1話 これがテンプレ転生ってやつか

市役所に勤めはじめてたったの3年。頭は良くも悪くもなく、運動神経もごくごく普通で、家も金持ちではないが貧乏でもなく、性格が暗いわけでも明るいわけでもなく、家族仲が冷め切ってるわけでもなければ幸福といえるほど暖かいわけでもない。

そんな俺の人生は、すでに終わってしまったらしい。

原因は不明。

覚えているのは、急に胸が痛苦しくなったことだけ。

心筋梗塞？

それともストレス性の急性心不全？

まあ、どちらでもいい。死んでしまったことに変わりはないのだ。たとえ地味で、凡庸で、永遠のその他大勢のひとりのままだったとしても、コツコツと地道に生きていけば、きっといつかいいことがあると、そう信じていた24年だったか……

(……もしかして、これが“いいこと”なのか？)

アルビオン王国ジャーウッド男爵ロビン・ウッドワードの嫡子、アーサー・ウッドワード。

それが今の俺の名前だ。

生年月日は始祖歴6225年4月第2週第3曜日。今は始祖歴6228年4月第2週第4曜日なので、満年齢だと3歳、数え年では4歳になる。この世界では数え年を使うのが常識なので、一応、4歳ということになっている。

今日までは、いつもボウツとしている病弱な“深窓のおぼっちゃま”をしていたわけだが、ボウツとしていた理由というのが“無意識的に前世のことを思い出そうとしていた”というものだったりする。

で、満3歳になって、ようやく頭がスッキリとした。

ついでに自分の身の上に起きた出来事も理解できた。

転生だ。ネットのSSでよくある神様の悪戯でどうのこうのとかいう事態に巻き込まれてしまったのだ。もともと、転生先というのが“俺の出身世界に存在しない物語に限りなく近い並行世界”らしい。なんかもう、なにそれって感じだが、薄ボンヤリと覚えている神様との邂逅の記憶によれば、そうだという話だ。

さらに俺はふたつのチートパワーを授かっている。

ひとつは【無窮の才能】。“1を聞くだけで10どころか1000がわかってしまう超絶的な理解力の高さ”と“どんな物事に対しても努力さえ続ければ際限なく成長できる常識外れな潜在能力”を備えているというもの。“地道にコツコツと努力する”ことしか取り柄がなかった俺には実にお似合いなチートパワーだ。

もうひとつは【幻想の叡智】。イメージは、『仮面ライダーW』のフィリップが使う【地球の本棚^{ほし}】に限りなく近い。ただ、そこで引き出せる情報というのが“存在世界の情報は引き出せない”という誓約を持つかわりに“古今東西の物語世界の全知識を引き出せる”というアホみたいなスペックを誇っていたりする。

おかげで今の俺は、その気になれば『宇宙戦艦ヤマト』の波動砲

を設計したり、あるとあらゆる料理のレシピを書き出したりすることが出来るわけで……ここがもう少し文明的な世界だったら、俺は天才科学者として大活躍できていたと思う。まあ、魔法的な知識のほうも山ほどあるので、天才魔法使いになることぐらいは難しく無いのだが。

さて。

まず大事なことは現状確認だが……これは3年間の“寝ぼけていた時期”に聞き知った事柄だけでも、かなりのことが推察可能だ。

この世界は“近世ヨーロッパ的な剣と魔法のファンタジー世界”のハルケギニアと呼ばれる地方らしい。文明レベルは16〜17世紀頃の西ヨーロッパあたりか？ 始祖ブリミルを奉る一神教的な口マリア教会が幅を利かせ、亜人やモンスターやらの驚異がある中、王侯貴族が特権階級として君臨することで社会を築いているものの、富農などの登場で旧秩序が揺らぎだしている……そういう感じだ。

一番の特徴は“貴族”“メイジ”の方程式が成り立っていること。

魔法至上主義とでも言うべきだろうか。ハルケギニアでは系統魔法と呼ばれる魔法をどれだけ操れるかで、貴族としてのステータスが定まるらしい。

もっとも、それはあくまで表向きの話だ。平民にも没落した貴族の末裔や表沙汰にできない血筋のご落胤なんかがいるし、貴族の中には才能に恵まれず、魔法のマの字も使えない者もいる。だが、基本はあくまで“貴族”“メイジ”。そういう感じだそう。

今生の父親、ジャーウッド男爵ロビン・ウッドワードも、当然、

メイジだ。

今生の母親、ジャーウッド男爵夫人エレナ・ウッドワードもまた、メイジだ。

共に系統特性は風らしい。系統特性は遺伝しやすいらしいので、おそらく俺も風系統のメイジになるのだろ。まあ、中には両親と異なる系統に目覚める者もいるため、実際にその時になってみないとなんとも言えないのだが。

んで。

俺がいる場所はハルケギニアの中でも少し変わった場所だ。

浮いているのだ。巨大な島が。

浮遊大陸アルビオン　そう呼ばれているらしい。

1メルが約1メートルらしいので、ハルケギニア地方の一定の範囲内を、高度約3000メートルの高さで周回しているそうだ。道理で空が妙に晴れわたっているわけだ。一年を通じて曇る日や雨の日が数えるほどしか無かったり、高度3000メートルなのに冬以外の季節はそこそ暖かい上に植物が元気に生い茂っている豊穡の大地であつたり……

あれだな、あれ。魔法だ、魔法。魔法のおかげだろ、それもこれも。

「あら、アーサー。目が覚めたの？」

ガチャツとドアを開け、メイドを引き連れた母上が入ってきた。

ハルケギニアでは珍しい長い黒髪をキツチリと結い上げている優しそうな人だ。実際、アーサーとしての3年間の記憶には、この人の優しさと芯の強さが鮮明に刻み込まれている。これで父上と結ばれる前は、名門伯爵家の御令嬢だったというのだから、意外とこの世界の貴族はたくましいのかもしれない。

「おはようございます、母上」

「具合は良さそうね」

「はい。もうすっかり、体がよくなった気がします」

「ふふふ。油断は禁物よ？」

メイドのアイリスが運んできた朝食を母上に見守られながら食べていく。以前は食べている最中に咳き込みだしたこともあったため、母上は常に俺の食事に同席してくれるのだ。

「母上、内密に話したいことがあるのですが……」

「……アイリス、刺繡ししゅうを初めておいてくれないかしら」

「はい、奥様」

我が家に4人しかいない使用人のひとりである侍女のアイリス
10代後半ながら馬番のコートスと結婚している人妻だ　が、
恭しく頭を下げ、すっかり平らげてしまった朝食のトレイを持って
退室していった。

「これでいい？」

「はい」

本来であれば、さらに綿密に人の耳を気にするべきところなのだろうが、ここはド田舎の男爵領だ。おまけにジャーウッド男爵邸には俺と母上を含めて今は6人しか人がいない。王軍の騎士として働

いている父上は、今もアルビオンのどこかで亜人や山賊の討伐任務についているはずだ。

「母上。これから突拍子もないことを……それこそ、異端と思われるかもしれないことを話しますが、どうか最後までお聞き下さい」

そう前置きすると、母上は居住まいを正し、真剣な表情でうなずいてきた。

俺は 全てを、話した。

前世があること。転生したこと。【無窮の才能】と【幻想の叡智】という力を授かっていること。3年かけて、そのことを思い出せたこと。今現在の自分が前世の俺と今生のアーサーが混ざり合った状態に近いこと……………

正直、話す先から不安になっていった。
いや違う。

話す前から不安で不安で仕方がなかった。

もし拒否されたら。

もし笑われたら。

もし信じてもらえなかったら。

いろいろな不安が胸の奥でうずまいたが、俺は最後まで自分のことを語り続けた。

その結果

「……よく、話してくれました」

母上は俺の両手を自らの両手で包み込むようにして握りながら、顔を伏せ、ふう、と長い吐息をもらしてきた。

「これで納得がいきました」

「……納得、ですか？」

「ええ、そうよ。私もアーサーに、話さないといけないことがあるのです。私があなたを身籠もった時……わたしと、あなたのお父上は、同じ夢を見たのです」

そこから語られた内容は、かなり衝撃的だった。

父上と母上は長く子供ができなかつたらしい。さもありあん。夢に現れた神様が本物であるなら、本来、母上は子供を身ごもれない体だったのだから、不妊治療なんて存在しそもないこの世界では絶望的だったのだろう。

そう、神様だ。

父上と母上は“始祖ブリミル”だと思いこんでいるようだ、ぼんやりと覚えている転生前の記憶によると、俺の世界の神様が“来世の両親に話をつけておく”と言っていた記憶がある。だからおそらく、両親の夢に出てきたのは、俺の世界の神様のはずだ。

その神様が、夢でこう両親に告げたらしい。

子を求めるおまえたちに尋ねる。

女よ。汝は子供を身ごもれない体だ。このままでは永久に子はいない。

男よ。妻は子供を身ごもれない体だ。このままでは永久に子はいない。

だがここに迷える魂がある。

新たな生を求める“星の子”が、ここにいる。

女よ。汝はこの“星の子”の母親になる覚悟があるか？
男よ。汝はこの“星の子”の父親になる覚悟があるか？

この“星の子”はいずれ光り輝き“太陽の子”となる。

その輝きは幾多いくたの魂を照らし、数多あまたの魂を焼き焦がすだろう。

子を求めるおまえたちに尋ねる。

“星の子”を愛し、慈しみ、信じ、見守り続ける覚悟が、おまえたちにあるか？

父上と母上は即答したそうだ。

はい、と。

そして夢から3ヶ月後、母上の妊娠が発覚。以前から親交のある司祭様に相談したところ、夢に現れたのが始祖ブリミルであり、生まれる“星の子”が始祖に祝福された存在かもしれないが、今のご時世では、ちよつとしたことで異端扱いされるかもしれないため、秘密にしておくべきだろうと忠告を受けたそうだ。

両親はその通りにした。

そして夢を見た10ヶ月後の始祖歴6225年4月第2週第3曜日、俺が生まれた。

「あなたが特別であることは、前から知っていました。その特別の意味が、今までわからなかったけど……前世の記憶と始祖ブリミル様の贈り物を持って生まれたことが、それだったのね」

母上は何故か、指先で自分の目元にたまった涙を拭っていた。

「すべてを思い出したというなら、もう体は、平気になったの？」

「……多分、平気です」
「そう……」

母上は俺を抱きしめてくれた。

「正直、あなたの言うことを全部理解できたわけじゃないわ。それに……戸惑っているところもあるのは事実よ。でも、あなたが私たちの子供であることも、疑いようのない事実なのよ。それだけは覚えていてね」

「……うん」

「アーサー。わたしたちの子供に生まれてくれて、ありがとう」
「………うん」

いつしか俺は母上を抱きしめ返していた。

目からボロボロと涙が溢れ出てくる。

どうしてなのかわからない。

嬉しいのか悲しいのかも、よくわからなくなっている。

だが、ひとつだけわかっていたことがあった。

俺はアーサーだ。

ジャーウッド男爵ロビン・ウッドワードと、ジャーウッド男爵夫人エレナ・ウッドワードの間に生まれたアーサー・ウッドワードなのだ………

第1話 これがテンプレ転生ってやつか（後書き）

補足1：始祖歴について

作者が適当に決めたオリジナル設定……だったつもりでしたが、違ったようです（汗）。あと、ワルドの年齢を勘違いしていたおかげでいろいろと問題点が……（涙）。でもこのまま逝きます。ご了承ください。

また、原作における各キャラの年齢、各種出来事も作者の独断と偏見で調整されています。ご注意ください。

補足2：歴法について

原作では特別な呼称が用いられていますが、本作ではわかりやすさを優先し、次のように言い換えています。

虚無の曜日	第1曜日または虚無曜日
ユルの曜日	第2曜日
エオーの曜日	第3曜日
マンの曜日	第4曜日
ラーグの曜日	第5曜日
イングの曜日	第6曜日
オセルの曜日	第7曜日
ダエグの曜日	第8曜日
フレイヤの週	第1週
ヘイムダルの週	第2週
エオローの週	第3週
ティワズの週	第4週
ヤラの月	1月

ハガルの月	2月
テイルの月	3月
フェオの月	4月
ウルの月	5月
ニユーイの月	6月
アンスールの月	7月
ニイドの月	8月
ラドの月	9月
ケンの月	10月
ギューフの月	11月
ウインの月	12月

補足3：名前について

原作のアルビオン貴族は「
・オブ・
」というパターンが踏襲されていましたが、ウェールズ王子の名が「ウェールズ・テューダー」または「プリンス・オブ・ウェールズ」または「ウェールズ」だったことから、本作では以下の形に設定変更しました。

1) 基本は「領地名」+「爵位 or 立場」+「個人名」+「家名」
(+「敬称」)

ex・サウスゴータ 爵令嬢マチルダ・

ex・ジャーウッド男爵ロビン・ウッドワード卿

2) 国王になると改名する

ex・ジエームズ1世

3) 王位継承権保持者は「プリンス(プリンセス)・オブ・「個人名」」で呼ばれる

ex・プリンス・オブ・ウェールズ(プリンス・オブ・ウェールズ「テューダー」)

4) 貴族の当主 or 次期当主は「個人名 or 立場」+ “ オブ ” + “ 領地名 ” で呼ばれる

e x ・マチルダ・オブ・サウスゴータ (サウスゴータ侯爵令嬢マチルダ)

e x ・ロビン・オブ・ジャーウッド (ジャーウッド男爵ロビン)

5) 一般人は「個人名」+ 「出身街村名 or 家名」が基本

e x ・ティファニア・ウエストウッド

e x ・ヘンリ・ボーウッド (原作表記は「サー・ヘンリ・ボーウッド」)

6) 子爵以上の貴族の尊称は「ロード」、男爵以下の尊称は「サー」

e x ・サー・ヘンリ・ボーウッド

第2話 内政チートにも手続きが必要（前書き）

2010年02月12日 誤字修正・一部推敲

2010年02月26日 内容修正（木炭が無い 木炭がある）

第2話 内政チートにも手続きが必要

報せを聞いて 文字通り魔法で 飛んで帰ってきた父上は、母上にもした話を改めて語ると、なにを言わずくしゃくしゃと俺の頭を撫で回し、再び飛んで任務に戻ってしまった。その間に父上が話した言葉は、

「ただいま」

「聞こう」

「そうか」

「頼む」

の4台詞だけだ。さすがは“沈黙”のロビン。【マス・サイレント広域静寂】と【ユビキタス偏在】の使い手である父上は、静かに、迅速に、どのような敵も打ち倒す寡黙な人としてアルビオン王国で名の知れた騎士シュウアリエのひとりなのだ。

もつとも、そんな父上にも弱点がある。

騎士としては最強ともいえる人だが、領主の才覚にだけは恵まれなかったのだ。ただ、父上にはその弱点を補ってくれる心強い味方がいる。

母上だ。

辣腕を振るったことで知られる先代宰相ブリモード伯爵トリス・モールデンの長女である母上は、名宰相から英才教育を施された“学のある女性”だ。それも実学ばかり教わっていたというのだから、この時代の貴族女性としては、かなり希有な存在だと思う。

また、元よりアルビオンでは“夫が家を出ている間は妻が女主人として切り盛りする”ことが良妻である条件のひとつとされている。昨今は“家”のことだけを切り盛りするのが通例になっているが、かつては領主の代理を勤めるのが普通だったというのだから、母上の在り方こそ伝統的なアルビオン女性貴族の在り方だと言ってもいいだろう。

事実、母上は病弱だった俺の面倒を見ながら、為政者としても精力的に活動していた。

父上が好きだけ騎士働きができるのも、そんな母上がいるからこそなのだ。

それだけに。

「アーサー。暇な時は散歩してみたらどうかしら？」

などと提案してきた時、俺はすぐ、その意図を悟った。

まあ、最初は、文字通りに“弱った体を鍛えるための散歩”を勧められたと思ったのだが、随行してくれる侍女のアイリスが、行く先々で男爵領について解説してくれたことで、本当の狙いが俺にもわかったってわけだ。

これが、領主教育の第一歩だということが。

帝王学というほど確固たるものではない。まずは領地を見せる。そこから、領地経営についてレクチャーする。そのつもりなのだろう。そうだとわかれば、俺としても期待に応えたい。よくわからないうちに始まってしまった第二の人生。せめて父上と母上が誇れる

息子になりたいところだし。

というわけで。

「母上、ひとつよろしいですか？」

「ええ、いいわよ」

散歩から帰ってきた俺は、執務室で書状をしたためている母上に提案を試みた。

「農法を変えてみませんか？」

「……農法？」

「はい。今現在行われている農法は、前世の知識で三圃式農業と呼ばれている古い農法です。これをもう一段階進歩させた輪栽式農業に切り替えれば、穀物の収穫量は少し落ちますが、そのかわりに家畜の飼料を増やすことができ、さらに連作による土壌のやせ細りを抑えることができます」

ファンタジー世界に転生やら召喚やらされた現代日本人なら、まず真っ先に思いつくのが、このあたりのことだと思う。だからこそ、俺は意気揚々と提案してみたのだが

「……アーサー。それは難しいわ」

母上は少し困った様子で微笑みながら否定してきた。

「おそらくアーサーの言う新しい農法に切り替えれば、きっとあなたの考える通り、生産力が向上するはずよ。でも、私たちは利益が見込めるからといって、簡単に新しいことを始められない理由があるの。それはなんだと思う？」

新しいことを始められない理由？

そんなものが……あつ、ひとつだけある。

「異端認定、ですか？」

瞬間、母上はパーツと輝くような笑顔になった。

「ええ、そうよ。その通り。いらっしやい」

母上は両手を広げて俺を誘ってきた。まだ満3歳児の俺に拒めるはずなどない。中身がどうだろうと、体は勝手に母上のぬくもりを求め、広げられた両腕の中に飛び込んでしまった。少し情けないが、まあ、甘えられるのは子供の頃だけの特権だ。今はこうした欲求を否定しないことにしよう。

「いい、よく覚えておくのよ。ハルケギニアでは始祖ブリミル様の時代に全てが完成されていたと考えるのが常識なの。その完成された社会に抵抗したのがエルフであり、始祖ブリミル様が亡くなられたことで、完成されていたはずのすべてが、少しずつ風化し始めていると見られているわ。だから、教会は始祖の時代に立ち返ることこそ正しいと主張しているの。それはアルビオンでも同じ。私たちは進歩ではなく、復古を進めなければいけないのよ。わかる？」

「うん。原典至上主義……みたいな感じだよね？」

「そうね。でも、その原典も、すでに失われて久しいわ。だから、後の時代に作られたいろいろな聖典から、原典はなんであつたのかを、教会で議論し、これが正しいと判断したものを正道としているの。それ以外は異端。背教よ」

「……じゃあ、進歩は否定されているんだ」

「そうじゃないの。ハルケギニアにも、いろいろと新しいことを始めようとする人たちがたくさんいるわ。ただ、教会を無視して進めるわけにはいかないだけなの。新しいことを始めるなら、ちゃんと教会を通して、それが始祖ブリミルの教えに反していないというお墨付きを……できれば大司教猊下か枢機卿猊下の承認を得ておけば、あとから異端扱いされることも無いわ」

なるほど。前世史のヨーロッパにおける暗黒時代よりは冗長性が残されているのか。だからこそ6000年なんて長きにわたって、あまり変わらない社会体制を築けたのかもしれない。もしかするとすでに広まっていた進歩的な技術や知識も、後の時代に異端扱いされ、廃れてしまった場合すらあるのだろう。

実際、前世史のヨーロッパにおける入浴の習慣も、ローマ時代には広まっていたが、暗黒時代には黒死病^{ペスト}のせいで“湯に浸かると死ぬ”なんて迷信が広がり、習慣そのものが廃れてしまった。しかも、そのせいで衛生状態が悪化の一途をたどり、さらに黒死病で死ぬ人が増えてしまったという悪循環に陥ったわけで……

「だから新しいことを始めるなら、手順を踏む必要があるの」

「具体的にどういう手順ですか？」

「そうね……まず、口のお堅い聖職者を味方につける必要があるわ。その人には、これからやろうとする“新しいこと”に近い、聖典の記述を探してもらうの。そのうえで、司祭様や大司教猊下にお話しを通して、寄付を行い、免状をいただく。これでようやく“新しいこと”を始められるわ」

「うわー。」

「だからまず、アーサーがやってみたいことを全て列挙してみる必要があると思うんだけど、どうかしら？」

「うん、まずはそこからだよな」

まあ、役所で許可を取り付けると似たようなものか。
だとしたら。

「母上、誰にも知られないように測量するのは、大丈夫だと思いますか？」

「測量？」

「男爵領の細かい地図を作ります。1サント単位の詳細な地図です」
「今ある地図じゃ、ダメなの？」

「あるんですか？」

「ええ、ちよつと待つてね」

母上は俺を離すと、背後の戸棚から巻物を取り出し、机に広げた。
だが一瞥するだけで、俺は首を横に振った。

「いえ、これだとおおざっぱすぎます」

「……範囲は男爵領だけね？」

「うん」

「いいわ。その方法を全部離してもらえる？ アーサーはまだ4歳なんだから、地図作りは別の人に任せるしかないけど、それでもいいわね？」

「はい、構いません」

できれば俺が監督したかったが、母上の言う通り、俺はまだ4歳の子供だ。父上と母上は俺が“星の子”であるとかわかっていたので

受け入れてくれたが、それすら知らない人々から見れば、ここまで
理知的すぎる子供なんて、不気味でしかないはずだし。

「じゃあ、まずは母さんに教えてもらえるかしら」

「うん。三角測量って言って」

話してみると、古典的な測量技術はすでにこの世界にも存在して
いることがわかった。礼拝堂や大聖堂などの大規模建築を行うため
に用いられていたらしい。ただ、母上が言うには、これで地図を作
った話は聞いたことがないそう。原因は……まあ、教会だろう。

測量技術はあくまで宗教建築のためのもの。

どうせ、そんな思いこみを造り上げていたのだろう。

だが、これを地図作成に使うことまでは禁じられていないはずだ。
と、母上も言っていた。

少なくとも王都にある王宮庭園の造園にも同じ技術が使われてい
た記憶がある、という話なのだから、おそらくその通りなのだと思
う。

「じゃあ、それで詳細な地図を作るところから始めればいいのね？」

「うん」

「地図を作ったあとは？」

「糞尿の処理方法、水車の改良、農法の改革とそれに伴う農地の整
理、あと簡単でもいいから読み書きと足し算引き算を平民に教える
こと。そんなところ　あつ、そう。燃料。薪に頼ってるけど、
木炭って、この世界にないの？」

「あるけど……なにに使うの？」

「男爵領の材木は家具に向いていないってアイリスが言ってたけど、あれだけの檜オークがあるんだから、炭焼きついでに手も入れたほうがいいと思うんだけど……」

本当にそうだろうか？ この世界にはゲームに登場しそうなモンスターが実在している。下手に森に入り込むことは、そうした危険と向き合うことにならないだろうか？

「……木炭……その手もあったわね」
「その手？」

「ええ、特にジャードウッド男爵領はペンドラゴン山脈に近いせいもあって、生活森林が広くとれているの。水の問題があるから開墾は難しいし、でも森を荒れたままにしておけば獣が住み着いちゃうかもしれないし」

話せば話すほど、いろいろな話が飛び出てきた。

「だったら」
「それなら」

俺と母上はそれから毎日のように新しい領地経営の可能性について議論していくことになるのだった。

第2話 内政チートにも手続きが必要（後書き）

補足1：アルビオン王国の地名について

本作ではアルビオン王国を大きく以下の3地域に分けています。

モード地方

アルビオン南部。王国の中枢。ペンドラゴン山脈から流れってくるテメセ川で潤っている豊かな地域。原作のルイズ&才人が降り立った港町ロサイスはモード地方の南東にあり、ここからサウスゴートイウム（シティオブサウスゴータ）を抜けると、南北の境界に王都ロンディニウムがある。

ウェールズ地方

アルビオン南西部。モード地方との間に、アルビオンの水瓶であるペンドラゴン山脈を挟んでいる亜人の多い森林地域。ジャーウツド男爵領を始め、武勲で身を立てている下級貴族の領地がひしめいている。一応、本編の序盤の主な舞台。

ハイランド地方

アルビオン北部。大貴族の領地が数多くある大丘陵地帯。水をノースゴータから伸びる運河に依存しており、水利権が極めて重要な地域となっている。本作ではレコン・キスタが最初に蜂起した地方を、ここにしている。

補足2：サウスゴートイウムについて

原作では「シティオブサウスゴータ」。元ネタはおそらくロンドンの起源となった「シティ・オブ・ロンドン」なのだろうが、内政

系の話をする上で「シティ・オブ・xxx」が山ほどあるとわかりづらいこと、また王都を「ロンディニウム」というシティ・オブ・ロンドンのさらに原形にあたる区画の名を当てはめていることから、原則的に「大都市はラテン語っぽい名前に統一」という形にしてある。

補足3：アルビオンの地域区分

17世紀の英仏がベースになるため、現代と異なり、あくまでおおざっぱな枠組みとして以下2種類の地域区分を設定してある。

1) 王領と所領

王領とは“王家直轄の領地”と“王国の共有財産”の意味を持つ（王家の所領も別に存在する）。前者を「王家所領」、後者を「王国所領」とすると、本作においては王都、主要街道と主要運河、アルビオンの水瓶であるペンドラゴン山脈が後者にあたる。

所領はそれ以外の地域。原則的に“人の手が届く範囲”が領地扱いされるため、厳密な境界線は存在しない。そのことから所領が接する生活森林を挟んで領主同士の対立が起きることもある。

2) 都市と農村

原則的に全ての所領は子爵以上の貴族が城館を構える“都市”を基準にしている。所領の中には複数の都市を構えるところもあるが、その場合はあくまで領主都市と代官都市があるという形になる。

また、各都市の下に付近の農村が従属している。農村は「シェントリ郷紳」という“爵位こそ持たないが同じ特権を認められている世襲一家”が治めるのが一般的だが、稀に領主貴族の子弟などがより高い爵位を持ちながらも農村を治めている場合もある（名ばかりで実際は王都や都市に出向している場合も多い。この場合の貴族はいわゆる俸給貴族化している）。

全ての農村は“親”となる都市を持つことになるため、納税は「農村 都市」の流れをたどり、親都市＋子農村群は、後に行政単位化していく（実際のヨーロッパ史ではローマ時代の区分を土台にカトリックの教区が行政にも利用され、伝統的な地域圏、県などの概念が定まっていた）。

なお、ウェールズ地方は名実共に自立した独立農村が多く、親都市の領主貴族と対等な関係を築いている場合が多い。本作のジャーウッド男爵領もそのひとつ。ジャーウッド男爵領の詳細についてはいずれ本編にて。

第3話 俺自身を魔改造するなら今のうち（前書き）

2010年02月12日 誤字修正・一部推敲

第3話 俺自身を魔改造するなら今のうち

母上と二人三脚でまとめあげた“ジャーウッド男爵領再編計画”は、夢のことを相談した司祭様を通じて正統認定を受けることが決まった。そのために3ヶ月もかけて、母上にたくさんの文章を書いて貰ったり、図面を書いたり、俺自身もこの世界の文字を学び、最後には母上とよく似た筆跡で自ら計画書をしたためられるようになる……

「アーサーの……【無窮の才能】？ それって、本当にすごいよね」
「うん……自分でもちよつと驚いている」

4歳児とは思えない、印刷したかのようにキレイな書面を見ながら、俺と母上は少なからず呆れかえることになった。

閑話休題。

内政チートはこうして手続き段階に入ったわけだが、さすがにやるうとするのが膨大だったこともあり、正統認定を受けられるのは来年の降臨祭 年始の10日間に行われる教会の祭 あたりになるだろうと母上に言われた。

だったらそれまで、俺は俺自身を鍛えることにしよう。
なにしろ俺には【無窮の才能】がある。

超絶的な理解力の高さと、何事に対しても際限なく成長できる潜在能力。それが真実だとすれば、病弱な今の俺でも、体を鍛えることでそれなりの域に達することができるはずだ。

というわけで。

「はあ……はあ……はあ……」

「アーサー、無理は禁物よ？」

「うん、大丈夫……」

俺は【幻想の叡智】から引つ張り出した、とある武術の基礎訓練を始めていた。

『魔法先生ネギま！』の京都神鳴流だ。

始祖ブリミルに仕えたと言われる4人の使い魔のひとりに大剣と長槍で始祖を守った“ガンダールヴ”という使い魔がいる。俺と母上が企んだのは、その技が伝承されていたことにするというものだ。

もちろん、ハルケギニアには、そうした技が残されていない。だが、「我こそはガンダールヴの技を継承した者だ！」と自称する人々は掃いて捨てるほどいるらしい。そこで、ハルケギニアと直接交流の無い、遙か東方にあるロバ・アル・カリイエからの旅人に“ガンダールヴの技”を教わったという形で、京都神鳴流を会得してしまおうというのが俺と母上の考えだった。

なお、あえて京都神鳴流を選んだことには、それなりの理由がある。

まず第一に“巨大モンスターとの戦いも想定した戦闘技術”だったという点。個人的には『刀語』の虚刀流や対戦格闘ゲームの技なんかも捨てがたかったのだが、やはり巨大モンスターが実在する世界にいる以上、そこを外して選ぶわけにいかないというのが、俺の考えだ。

第二に“多様な戦い方がある”という点。京都神鳴流は確かに剣術が基本だが、それ以外にも無手の技や手裏剣術、槍術などがある。使える武器が多いというのは、それだけで大きな利点だ。もちろん、全てを習熟するのは難しいだろうが、根本から異なる術理を改めて学ぶより、同じ流派の技術のほうが比較的学びやすいのは言うまでもないと思う。

第三に“氣が使えるそうだ”という点。これはまだ確かめていないが、初歩の初歩にあたる練氣の呼吸を試してみたところ、なんとなりそうな感覚があったのだ。しかも、氣を練っても母上は「魔力は感じないわね……」と言っていた。これなら異端とされる先住魔法と見なされた場合も反論ができる。

ブリミル教の正統と異端は必ずしも絶対のものではない。

ある時期の正統が後の時代に異端になる。

かつての異端は後の時代に正統になる。

同じ系統魔法の中でさえ、ある時代には異端とされたスペルが別の時代では正統とされていたというのだから、俺がもともと特殊な存在であることを考えれば、一般的な系統魔法と異なる“自己防衛手段”を得ておいたほうが選択肢も広がる。

「でも……きつついなあ」

「アーサー!？」

たった10回の素振りだけでフラフラになるなんて、今生の俺、どこまで病弱なんだ？

あれから半年。年末が近づいてくる頃になると、さすがに俺の体も丈夫になってきた。

「さすが【無窮の才能】……なのか？」

今では毎朝千本の素振りが日課になっている。

神鳴流も基礎となる対物近接攻撃の【斬岩】、対物間接攻撃の【斬空】、対霊近接攻撃の【斬魔】の3つを使いこなせるようになり、基本となる歩法などもそれなりの域に達しつつある。

もつとも、ここに来るまでちょっとばかり、厄介な問題も浮上した。

氣と魔力の相克問題だ。

練氣ができるようになっていくと、それだけで俺は熱を出して寝込むようになった。これまで通りとも言えるのだが、このことに違和感を覚えた俺は、まさか、と思い『魔法先生ネギま！』の知識から自らの氣を押さえ込む“封氣の行”と、逆に『ネギま』世界の魔法使いが魔力を練るために行う修行方法を試してみたのだが……

ビンゴだった。俺の中には、莫大な魔力が眠っていたのだ。

どうやら“転生呆け”していた3年の間、俺は意図することなく魔力をただ漏れにし続けていたらしい。おかげで魔力は常に枯渴状態、どうかしようと水系魔法などで治療すると幼子なのですぐ魔力飽和状態による高熱を出してしまい……ということを繰り返したため、自然と魔力容量が増大しまくっていたようだ。

そこで俺は氣を抑える方法と魔力を抑える方法をそれぞれ会得することにした。

本当は“氣と魔力の合一”により自らをブーストアップできる感んかほう卦法かんぱうを会得したかったのだが、1回試した時、高熱を出して死にかけてしまったため、母上から「基本ができあがるまで禁止」を言い渡されていたりする。そのため普段は魔力を抑え、神鳴流の鍛錬に励んでいたという感じだ。

……裏でこつそり、『ネギま』の魔法も練習してたけどな！

いやあ、あれはたいへんだった。『ネギま』の媒体、この世界に存在しないから、まずはそれを造り上げるところから始めたわけだし。まさかは母上もオーケストラの指揮棒タクのような、何でもない榆の枝が別世界の魔法の媒体だとは思わないだろう。

「ねえ、アーサー」

「はい、母上」

「タクこれト、なにかしら？（ピキピキ）」

「……（ビクビク）」

バレました or z

やはり、あれか？ 基礎の精霊魔法 “小物を動かす魔法” と言う名の念動魔法だとか “占いの魔法” という名の未来予測魔法、“水の濁りを消す魔法” という名の沈殿分離促進魔法だとか、“微風の魔法” という名の団扇魔法だとか、“灯火の魔法” という名の発火魔法だとか……とにかくにも基礎をしつこく練習しまくった
せいか？

バレないように攻撃魔法の練習は控えていたのに…… orz

「異世界の魔法は異端認定されやすいから禁止したはずよ？」

「……ごめんなさい」

「もう……」

母上は俺を抱きしめてくれた。

「そんなに魔法が使いたいなら、来年から王都に行ってみる？」

「……えっ？ 王都？」

「母さんの弟、あなたから見れば叔父にあたる人がいるの。貴族の子は7歳からいろいろと学ぶのが普通だけど……どう？ 行ってみる？」

即答できなかった。

理由はある。

神鳴流の鍛錬はどうするのか。年明けから始まるジャーウッド男爵領再編計画はどうするのか。そして、この家から離れること、そのものが……

「……母上は、行ったほうがいいと思いますか？」

「あなたの将来を考えれば、行ったほうがいいわ。ただ……」

母上はギュッと俺を抱きしめてくれた。

「私の可愛いアーサーと離れたくないと思うところもある。それが本音よ？」

「……俺も、そうです」

「私」

「？」

「もしくは“僕”。“俺”は貴族として、不適切よ？」

「……うん」

前世を含めれば二十代後半のはずなのだが、やはり心は体に引つ張られやすいというか、なんというか……こうして母上に抱きしめられていると、すぐく落ち着いてしまふアーサー・ウッドワード、満3歳8ヶ月なのであった。

ちなみに。

「はっ！ 父上、これが斬岩剣です」

「……アーサー」

「はい」

「教えてくれないか」

「……はい？」

年末になり、久しぶりに家に戻ってきた父上に修練の結果を見せると、父上が神鳴流を習いたがった。一応、“東方に残されていたガンダールヴの技”ということにしてあるため、基本的なところを実演付きで教えることになったのだが、

「……はっ！」

ドゴーンッ……！

「……………（ポカーン）」
「ふふふ、さすがお父さんね」

この父上、わずか3日で【斬岩】と【斬空】と【斬魔】を会得しているのですが。

そりゃあ、氣の代わりに魔力を使ってるから修得も早いのかもしれないが。

でもさ。

俺もまだできない瞬動を、口頭説明だけでやってみせたわけで。

もしかして父上にも【無窮の才能】、あつたりするのか？

第3話 俺自身を魔改造するなら今のうち（後書き）

事実上のプロローグは以上で終了。

次回からは「悪魔騒動編^{エルフ}」。

マチルダお姉さんが少しだけ登場しますが、まだまだオリ設定街道を驍進します。ご了承下さい。

第4話 正統認定をもらっただけのつもりが（前書き）

2010年02月07日	誤字修正
2010年02月23日	誤記修正

第4話 正統認定をもらっただけのつもりが

始祖歴6229年1月第3週虚無の日、降臨祭をジャーウッド男爵領で過ごした父上は、再び任地であるモード地方に戻ることにした。本来であれば、これを見送るだけだったのだが、今年はジャーウッド男爵領再編計画に関わる様々な技術・知識の正統認定を受け取る必要がある。そのため今年は母上と、ついでに俺も、アルビオン王国の中心地というべきモード地方に向かうことになった。

ちなみにアルビオン王国は大きく3つの地域に分かれている。

北部の大丘陵地帯はハイランド地方。多くの貴族所領がひしめく政争のメッカらしい。

南西部の山岳森林地帯がウェールズ地方。亜人や魔獣の多い小貴族所領の戦場だ。

南東部の大平原がモード地方。王都や大司教座を含む王国の中心地だ。

ジャーウッド男爵領はウェールズ地方の東側、アルビオンの水瓶と呼ばれるペンドラゴン山脈にほど近い場所に広がっている。このペンドラゴン山脈は大切な水源のため、初代アルビオン王の御代から人の立ち入りが禁止されている。おかげで今も亜人や魔獣の楽園と化しており、ここに面したウェールズ地方やモード地方の所領はいつも危険にさらされている。その危険から王国を守るのが、父上が所属するアルビオン王軍の主な勤めだ。

よって父上の任地も、サウスゴートイウムから離れたペンドラゴン山脈に近いところにある。同行できるのはサウスゴートイウムの飛竜籠港までということだ。

「……………」

「うん、稽古はちゃんと続けるから心配しないで」

「……………」

「あなたも気を付けてね」

寡黙な父上は、俺の頭を撫で、母上と抱きしめ会うつと、そのまま父上は【飛翔^{フライ}】で南にある任地に向けて飛び立っていった。

ただまあ……どこことなく『ドラゴンボールZ』の悟空たちが武空術でバビューンと飛んでいく光景に似ていたあたり、父上のチートさの理由が垣間見えるというか、なんというか。

「アーサー、まずはサウスゴータ太守様のところに行くわよ」

「はい、母上」

俺と母上は雇い馬車　貴族が利用する飛竜籠港にはタクシー的な雇い馬車がよくいるものらしい　を捕まえ、まずこの地の統治者であるサウスゴータ侯爵の下に向かうことにした。

「お忙しい中、急な訪問にもご対応いただき、誠にありがとうございます」

「なにを言う。可愛い妹弟子が息子を連れて来たとあっては、会わぬわけにいくまい」

何人もの待ち人をスルーする形で謁見室まで通された母上と俺を待ちかまえていたのは、緑色の髪に白髪が混ざっている初老の優しいような男性だった。

サウスゴータ侯爵クロード・アジャン閣下。

始祖ブリミルがアルビオンに初めて降臨された場所として知られる宗教都市サウスゴートイウムを治める大貴族だ。母上から聞いた話では、王国においてはアルビオン大司教と同等に近い宗教的影響力を持っているらしい。ある意味、王国における宗教大臣とも言うべき“王国と教会の仲介役”と考えればいいようだ。

そして、そんな今代のサウスゴータ侯爵は、若い頃、母上の父親である先代宰相の従者をしていた時期がある。他にも数名、祖父の教えを受けた人々が王国の要職についているとか。そんな“祖父の弟子”たちと母上は、今なお、実の兄弟のように誼を結んで^{よしみ}いるらしいが……って、どれだけすごいんだ、うちの母上は。

「して、その子が……」

サウスゴータ侯の目が俺に向けられた。母も視線で、自己紹介を促してくる。

俺は母上から教わった作法通りに頭を下げた。

「ジャーウッド男爵ロビン・ウッドワードが嫡子、アーサーにございます」

「おお、その歳でその振る舞いとは、さすが“沈黙”と“百枚舌”の息子だな」

んっ？ “百枚舌”？

「……クロードお兄様、なにかおっしゃいました？」

「ははは、やはり隠しておったか」

ジト目の母上と快活に笑うサウスゴータ侯。ええっと……母上？

「なに、おぬしの母上は幼い頃から弁舌も巧みでな、やりこめられてしまった宮廷の雀どもが“二枚舌どころか百枚はある”などと言いつつ出したせいで、いつしか珍妙な二つ名が知れ渡ってしまったのだよ」

なるほど。さすが母上だ。いったい、どんな武勇伝があることやら。

「もう……あれは若気の至りと何度も言っただけなのに」

母上がむくれている。とても貴重な光景だ。

「そのあたりについては、また今夜、ゆっくりと話そうじゃないか。それよりもペトロ様とお会いするつもりなのだろう？」

「ええ、以前お送りした書簡は見ていただけましたか？」

「見た。検討した。誰の入れ知恵だ？」

「実は最近まで、東方から来た旅人を我が家でお世話しておりましたの」

「ほう……東方からの？」

「始祖ブリミルの教えを確かめるために、わざわざ危険なサハラを越えていらしたそうです。ただ、アルビオンを訪れた際、ウェールズ地方側から入られたとか。それに高齢だったこともあり、アルビオンの薄い空気になかなか慣れず、とうとう倒れられてしまい、そこをたまたま私が見つけたの」

「ふむ。その礼に教わった、ということか」

「他にも、東方に伝えられていた“ガンダールヴの技”を、この子に教えていただきました」

「ガンダールヴの技を？」

「今年の10月に元気になられ、旅立たれましたので、技を知るのはこの子だけです。ただ、この子が父親に技を教えたところ、今ではロビンのほうが使いこなしていますわ」

「あいつか……あいつは特別だからなあ」

「アーサーは彼の息子です。いずれ、ロビンも越えてくれると信じています」

「おーっ、あいつを越えるか。それは将来が楽しみだ」

何気なく交わされる2人の会話だが……なんだろう。母上もサウスゴータ伯も、目が笑っていないように見えるのだが。

「我らが妹弟子よ、私も一枚、かませてもらえるかな？」

「最初からそのつもりでは？」

「私からもよろしくと、大司教猥下に伝えてくれ」

「承知致しました、クロード・オブ・サウスゴータ」

母上は恭しくスカートをつまみ上げ、目礼した。

なんというか。

これが狐と狸の化かし合いってやつなのだろう。ふたりとも本音は語らずに、なんらかの取り引きを成立させてしまったわけで……俺に、できるだろうか？ いや、できるはずだ。なにしろ俺は、母上の息子なのだし。

「アーサーは我が家で預かっておこう。歳は離れているが、娘が暇をしている」

「お願いいたします　アーサー」

「はい、母上。お帰りをお待ちします」

これから母上が行うのは教会を相手にした政治的な戦いだ。

母方の先々代の頃から親交がある司祭ペトロを仲介人に、事なかれ主義の典型と評されるアルビオン大司教から数々の正統認定をもち取らなければ、ジャーウッド男爵領再編計画が一步たりとも先へ進められない。その駆け引きの場に、俺は不要だ。むしろ足手まといになる。経験を積む意味で同席したいところもあるが、さすがにまだ5歳の子供が同席するわけにもいかないのだ。

よって、今は待つことしかできない。もどかしい限りだが。

両親のため、領民のため、男爵領のために内政チートをかまそう
と思いつたのは俺自身なのに、重要な時には待つことしかできな
いなんて……

「早く大人になりたい……」

案内された誰もいない一室で、窓辺に立った俺は溜息まじりに、
そうつぶやいていた。

サウスゴータ侯の娘は、なぜかいなかった。

案内してくれたメイドは、この部屋でお待ち下さいと言っていた
が……

「……はあ」

子供の相手は苦手だ。今生ではそもそも同世代と接する機会が無
かったため、そのあたりについて意識することがなかったのだが……
……これからはそうもいかないだろう。少なくとも一人前の貴族に
なるには、王都の郊外にあるアルビオン魔法学校に通わなければな
らない。

アルビオン魔法学校の就学期間は3年間。就学年齢は特に定められていないが、だいたい14歳前後で入学するのが通例らしい。最年少入学記録は、母上の知る限りだと12歳だとか。卒業すれば年齢に関わらず一人前として扱われるというから、仮に12歳で入学できたとして、俺が一人前になれるまで最短で、あと10年もかかる計算になる。

(10年は長いよな……………んっ?)

なにか妙な気配が壁のほうに感じられた。
視線を向けてみる。

ガタンッ

まるで狙ったようなタイミングで、壁の一部が回転した。忍者屋敷のどんでん返し。でも壁は西洋的。おまけに、壁に寄りかかるように立っているドレス姿の女の子の姿がある。

女の子は成長が早いものだが、それを考慮にいれても7、8歳といたところだろう。サラリと伸びる緑色の長い髪が、明るい緑色のドレスとよく合っている。茶色い瞳をパチクリと見開いているのは、突然のことで驚いているからだと思うが……

「……………」
「……………」

俺と彼女は、しばらくの間、なにも反応できず、ジッと視線をあわせ続けた。

「あの」

と、俺がとりあえず声をかけることにしたが、まさにその瞬間、

「!？」

驚いた彼女が右手に持っていた指揮棒タクトを振り上げた。
魔法の杖だ。

まずい　　と思った瞬間、俺の体は動きだしていた。

父上に神鳴流を教えたのは、たったの14日間。だが、その14日間に、俺もまた父上から戦いのイロハを教わっていた。その教えは【無窮の才能】によって俺の血肉となり、メイジを相手にした時に一番大切なことを、即座に思い出させたのだ。

相手のスペルは潰せ。

潰せないなら見極めろ。

見極めたら避ける。

そうなる前に

（　　先手必勝　　）

たった一步の踏み込みで一氣に間合いを詰めると同時に、左拳の甲でタクトを握る右手を打ち抜き、そのまま右拳を鳩尾に叩き込んで呼吸困難に追い込む　　ということをやリかけたが、踏み込んだ時点で、

（手加減しないと　　）

と思い至れた自分は、立派だと思う。

実際にやったのは彼女の右手を左手で掴み、突き出しかけた右拳を開いて、彼女の口を塞ぐというものだった。

抵抗らしい抵抗が無かったのは、それだけ俺の動きが速すぎたせいだろう。まあ、そのために鍛錬を積み重ねてきたのだから、そうならしてもらわなければ困るという話もあるのだが。

「お静かに。私はジャーウッド男爵長子アーサー。クロード・オブ・サウスゴータのお許しのもと、母上が教会での些事を終えられるまで滞在しています」

俺はできるだけゆっくりと、自分の立場を告げることから始めた。

「これから手を離しますが、どうぞお静かに願います。よろしいですか？」

尋ねてみると、少女は目を白黒させながらも、コクン、と頷いてきた。

これでいい。

まだ叫ばれる可能性もあるが、一応、言すべきことは告げたつもりだ。

実際、手を離しつつ下がってみると、少女は叫ぶことも、さらにタクトを振り上げることもなかった。それどころか顔を真っ赤に染め、恥ずかしそうにもジモジとしている。

「う、ごめんなさい……急なことだったから、驚いちゃって……」

7、8歳の女の子にしては、物言いがしっかりしている。

「私も驚きました。壁が急転に回転したので……失礼ですが、あなたは？」

「あつ……」

彼女は慌てながら前髪を指で払い、スカートをつまみあげて挨拶をしてきた。

「お、お恥ずかしいところを、お見せしました。わたしはサウスゴータ侯爵クロード・アジャンの娘、マチルダと申します」

第4話 正統認定をもらっただけのつもりが（後書き）

補足1：サウスゴータ侯爵家の家名について

マチルダといえばマチルダ・アジャン以外、考えられない筆者は、どう考えてもただのガンヲタです。どうもありが（ry

補足2：本作のマチルダちゃん

まだ全然スレていないため、基本的にものすごく普通の女の子です。ここからどうやって原作の性格まで持っていけばいいのかな……ほんと、どうしょ。魔法学院で苦労したことにするしかないのかな？

2011年2月12日補足

マチルダちゃんの性格は「特に気にしない」ことに決めました。
ご了承ください。

第5話 侯爵令嬢にふりまわされて（前書き）

ストックが出来たので次話は明日（2011年2月13日）に。

第5話 侯爵令嬢にふりまわされて

ツツコミどころは無数にある。

サウスゴータ侯爵邸が隠し通路だらけという時点で、どここの忍者屋敷だよとツツコミを入れそうになったのは、まだまだ序の口だった。これを利用し、屋敷内を遊び回っている少女がいることや、その問題児がサウスゴータ侯の一人娘、サウスゴータ侯爵令嬢マチルダだったというあたりも、ツツコミを入れるべきところだと思う。

確かにサウスゴータ侯は、

アーサーは我が家で預かっておこう。歳は離れているが、娘が暇をしている。

と言っていた。

暇をしていた。だから探検していてもおかしくはない。まあ、そうなのだろう。

だが、侯爵令嬢のすることではない。

そもそもマチルダは10歳らしい。

俺より5歳上だ。

本物の子供である彼女とエセ子供である俺を比較するのはどうかと思うが、10歳の侯爵令嬢が自家の邸宅で暇つぶしに探検ゴツコだなんて……いや、子供だからおかしくないのか？ でも貴族だろうか？ モラトリウムな時間を長くとれる現代と違い、平均寿命の関係から、近代までは意外なほど早熟であることが求められていたはずなんだが。少なくとも男爵領の村の子供たちはそうだったし、母上も俺に対して子供扱いしてくるようなことは……

んっ？ まさかうちだけ特殊とか？
普通の貴族は、これでいいとか？
いやいや、そうだとっても

「マチルダ様、どうして私も一緒に探検しなければならないのですか？」

「だって、お父様がわたしの遊び相手になれって言ったんでしょ？」

「……直接そうだとは言っていないせんが？」

「言ってるじゃない。娘が暇をしているって。ほら、こっちよ」

マチルダ様はタクトに【光明^{ライト}】を灯しつつ、古めかしい皮製の地図を参考にしながら迷路のような細くて狭い隠し通路をズンズンと進み続けている。

途中、行き止まりにつきあたることもあったが、そのたびに彼女は普遍魔法^{ユニバーサルマジック}の【開錠^{アンロック}】を唱え、新たな道を作り、通り過ぎたあとには必ず【施錠^{ロック}】で元に戻していった。

俺が今さら戻れないのは、そのせいだ。

ついてきなさい、と引つ張り込まれたのが運の尽き。最初は忍者屋敷的な機械仕掛けの隠し扉だろうとタカをくくっていたが、ここは魔法が実在するハルケギニアだ。隠し扉の類^{たぐい}はすべて、魔法で開閉するのが当たり前という仕組みになっており……

というか、便利すぎるだろ。【施錠^{ロック}】と【開錠^{アンロック}】。

単に鍵を開け掛けしてるだけじゃないぞ？

なんで勝手に壁が回ったり、壁が上下に動いたりするんだ？

まさかこの邸宅の特殊な仕掛けか？

だとしたら、どんだけ隠し通路に手間暇をかけてるんだ？

「すごいでしょ」

「……えっ？」

「この屋敷、迷宮館って言われてるの。表に近いところはそうでもないけど、奥のほうなんて、1階を歩いていたらつもりなのに、気がつくとも2階にいたりするのよ？ 悪戯好きな先祖様がみんなを驚かせるために建てたんですって。でも、こんな隠し通路までたくさんあるなんて、きつとお父様もご存じないわね」

いいえ、きつと気づいています。

母上の兄弟子が、そんな甘い人のはずがありませんって。

「あつ、ここよ、ここ！」

彼女は通路の途中で立ち止まると、地図を確認しつつ、壁を撫で回した。

「今度こそ絶対そう！」

「……今度こそ？」

「ふふふ。ほら、ここに立って」

楽しそうなマチルダ様は、右手で地図とタクトと一緒に持つと、左手で俺の手を引っ張り、壁に背を預けるようにして並んで立つように促した。

「いくわよ」

ルーンを唱え出す。【開錠】だ。アンロック

ガコン

留め金の外れる音が聞こえ、ガタンツと壁が半回転した。
どんでん返しの隠し扉。

そこを出た先にあったのは

「……倉庫？」

大きなワイン樽らしきもの、魔法で凍らされているらしい肉類や野菜類が入った木箱などが処狭しと並べられている、薄暗い地下倉庫らしき場所に出た。

「さっ、急ぐわよ」

「……なにを？」

「お菓子里に決まってるじゃない！」

そんな決まりは存在しない。

でもまあ。

隠し通路の地図を手に入れ、真っ先に思いついたのが“お菓子のつまみ食い”というあたり、彼女は正しく10歳の女の子なのだと思う。

「昨日、ガリアから小さいお星様みたいな甘いお菓子里が届いたはずなのよ。あなたも探さない。硝子瓶に入ってるはずだから！」

コンペイトウ
金平糖の類だろうか。

そういえば日本の金平糖も、元々はポルトガル語の“confeiト”^tを語源とする南蛮菓子的一种だ。中世というより17世紀の激動極まりないヨーロッパに近い感じがある現在のハルケギニアにな

ら、あってもおかしくお菓子ではある。原材料がどこで採れるのか、興味が尽きないところでもあるが。

あー、そういえば地図もヨーロッパにちよつと似てるんだよなあ。

イギリスがアルビオン王国で、

ネーデルランドからフランス北部にかけてがトリステイン王国で、フランス南部からスペインにかけてがガリア王国で、

ドイツあたりが帝政ゲルマニアで、

イタリア半島がロマリア連合皇国で、

それらの東にはサハラと呼ばれる広大な砂漠地帯が広がり、どうやら黒海あたりに人類の宿敵にあたるエルフが陣取っている聖地が存在する。

というのが俺の見たこの世界の概念地図に対する大まかな感想だ。

ちなみにアフリカ大陸にあたる陸地も存在が噂されているらしいが、具体的にはわかっていない。というか、誰も興味を抱いていない。そもそも海には、海の魔物がひしめいているため、沿岸航海くらいしか行われていないらしい。

逆に言うとハルケギニア地方は、海と砂漠が天然の要害となっているおかげで大規模な魔獣の侵攻を防いでいられているようだ。その中でも浮遊大陸であるアルビオンは、地上からの侵攻も難しいため、政略的には、かなり恵まれた立地条件にある。だからといって絶対安全というわけでもないが。なにしろ国内にペンドラゴン山脈なんていう、魔獣の楽園があるわけ……

「ほら、探しなさいって言ってるでしょッ」

マチルダ様は声を抑えつつも、慌てた様子で叱りつけてきた。

「……サウスゴータ侯にバレたら、怒られるのでは？」

俺がそう告げると、彼女は面白いように、ピシッ、と凍り付いてしまった。

それでもすぐに再起動し、俺に駆け寄り、ガツと両肩を掴んできた。

「あなたも同罪よ？」

「いえ、私は反対し続けたと証言します」

「わ、わたしが、あなたも積極的だったって主張するわよッ」

「サウスゴータ侯がお信じになられるとお思いですか？」

「うつ……」

まあ、可愛いイタズラなんだし、協力しても良いといえば良いのだが……んっ？

「で、でも」

「しっ」

俺は自分の唇に人差し指をたてた。直後、キィー、と扉の開く音が響き、驚いたマチルダ様も慌てて自らの口を両手で塞いだ。とりあえず、俺たちのいる場所と扉との間には木箱が積み上げられているため、直接、目で確かめることができない。だが、誰かが入ってきたのは確実だ。

「ふん、こんなところで話さねばならんとはな」

んっ？ 尊大そんな壮年男性の声だが……？

「お許し下さい。他のところは使用人の目と耳がございます。下手に話せば、あの男の耳に届いてしまつかもしれません」

2人目の声は初老の男性といった感じだ。

「まあ、いい。それで、結果は？」

「はっ。伯爵閣下のご慧眼けいがん通り、大司教猊下げいかには、いささか困った趣味がございました。御命令があれば、今すぐにも猊下のお気に入りを確保することが可能にございます」

「なるほど、なるほど。あとは直接、あの草髪の首をはねるネタを仕入れるだけだな」

「それに関して少々……」

「言つて見る」

「はっ。あの男が仕えているモード大公殿下に絡み、不穏な噂がございます」

「モード公？ よもや、あの愛人の噂か？」

「はい」

「なにを今さ……いや、その愛人、まさか平民なのか？」

「それだけではございません」

「さらに何が？」

「エルフにございます」

「……なに？」

「モード大公殿下の若い愛妾めいせつは、黄金のような長い髪と翠玉すいぎよくのような緑の瞳、そして髪から突き出るほど長い耳を持っているとの噂が囁かれています」

尊大な壮年男性は絶句していた。

俺もそうだ。

マチルダ様もどついうわけか、真っ青になって……待てよ、まさ

かこの子……………

「エ、エルフが王族の愛妾だと!？」

「伯爵閣下、どうぞお静かに……………」

「静かになどできるか!？ 恐れ多くも始祖ブリミルに連なるアルピオン王家にお生まれになったというのに、エルフを愛妾にするなど !？」

「閣下」

「なんたる不敬! なんたる背教! 王家の矜持きよつじ、そこまで落したというのか!？」

「…………閣下、それだけではないのです」

初老の男性は諦めた様子で話を進めた。

「ま、まだあるのか!？」

「はっ。このところ、モード大公家に“幼い少女”の新しい衣裳が納入されております」

「…………なんだ、と？」

「服の大きさからして3、4歳ではないかと……………」

「ま、ま、ま まさかッ!」

「はっ」

初老の男性は、ハッキリと断言した。

「おそらく件くだんのエルフとの間に娘が生まれているものと推察されま
す」

「…………へ、陛下にご注進せねば!」

「お待ち下さい」

「なにを待つ! 始祖の血脈とエルフの合いの子など…………考えるだ

けでもおぞましい！ 今すぐ真偽を確かめ、事実とあれば邪悪なエルフの血を、アルビオンから一掃せねばならんだろうが！！」

「只今、手の者に確認をさせております。もしこれが真実であれば、大公殿下の腹心であるクロード・アジャンが知らないわけがございません。なれば必ずや、その咎はクロード・アジャンにも及びます。さすれば、閣下こそが真のサウスゴータ太守の座につく千載一遇の機会が生まれるというもの……お焦りなさいませんよう、謹んで具申する次第にございます」

「う、うむ……おぬしの言う通りだ」

男たちはその後、次の情報交換の日付と段取りを決めたうえで倉庫を出ていった。

俺は硬直していた。

マチルダ様にいたっては、両手で口を塞いだまま、小刻みに震えだしている。

俺は確信を抱きつつ、念のため、確認してみた。

「マチルダ様。今の話……ご存じだったのですね？」

ハッとした彼女は、目を見開きながら逃げるように後ろに下がった。だが、ここは倉庫だ。すぐ後ろにはワイン樽がある。逃げようにも逃げられない。それに彼女は気づいていないだろうが、先ほどの2人が密談に使ったような場所だ。おそらくここで大声を張り上げても、誰にも聞こえず、誰にも気づかれないだろう……

「……弱ったなあ」

俺は思わずそうばやきながら、ガリガリと頭をかきだした。もしかすると。

これって王国を揺るがす大問題に発展するんじゃないのか？

第5話 侯爵令嬢にふりまわされて（後書き）

補足1：スペルの名称について

原作では日本語表記、カタカタ表記などが混在していますが、本作では原則として日本語表記＋カタカナ表記で統一していく予定です。

補足2：ハルケギニアの地理について

位置関係をおおざっぱに表すとそうなる、という程度のものだとお考え下さい。「聖地」はもつと適切なところ（嘆いている壁があるところか黒い石があるところ）がありますが、原作を読む限り、砂漠のド真ん中にありそうな気配がするため、あえて「砂漠化している黒海の中」という感じにしています。

今後、なんらかの追加情報が出ても、本作ではこの設定で行くつもりです。ご了承下さい。

補足3：ロマリア教の叙階について

某普遍的な一神教がモデルですが、わかりやすさ重視でサクツとした設定を考えてあります。作中では教皇選挙編で詳しく触れる予定ですが、まだ先の話になるので、基本となる叙階についてののみ、サクツと補足しておきます。

教皇（ロマリア大司教）

教皇庁とロマリア大司教区を統括するブリミル教の最高指導者。作中ではまだ保守派の俗物教皇様がアレクサンデル6世ばりに我が

世の春を謳歌しているところ。

枢機卿（司教枢機卿）

教皇庁直属の偉い人たち。一般的に、教皇選出権を持つ本物の実力者である「司教枢機卿」のことを意味している。

司祭枢機卿、助祭枢機卿

いわゆる枢機卿とは別に教皇直属で動く偉い人たちのこと。聖職者なら「司祭枢機卿」、非聖職者なら「助祭枢機卿」になる。原作でジュリオ・チェザーレが助祭枢機卿だとされているので、この区分も本作では採用している。

大司教

地域を統括する聖職者。「大司教区（大司教自身がいる教区）」と周辺の「司教区（いわゆる教区）」を従えている。アルビオンやトリステインには大司教区が1つずつしかない。一応、教皇はローマリア大司教を兼任している。

なお、大司教や司教の直轄にあたる教会は「大聖堂（大教会堂）」と呼ばれる。

司教

教区を統括している偉い人。教区は基本的に、都市と、そこに付随する農村群のことを意味している。この「教区」という区分が現実だといえると厄介な問題を引き起こしたりするのだが、そのあたりの話は面倒すぎるので本作では基本的にパスの方向で。

なお、大司教や司教の直轄にあたる教会は「大聖堂（大教会堂）」と呼ばれる。

司祭

教会（教会堂）を統括する偉い人。個々人の政治能力が必要な司

教と違い、大司教の免状さえあれば司祭になれるので、とにかくにも腐つてゐる連中が多いことにしてある。もちろん中にはまともな人もいる。

なお、教会を束ねる司祭は「教会司祭」、修道院にいる司教は「修道司祭」とも言う。修道院は宗教関係の設定を増やすのが面倒なので、そういう派閥がある（だから修道院長も階位は司祭）というだけの設定に留めているのでつつこみはご勘弁を。

また、都市部では街区ごとに教会がある場合が多い。農村になると教会が無く、集会場を兼ねた「礼拝堂」しか無い場合も多い。こうした農村部には親都市の大聖堂から巡回司祭が派遣される。で、得てしてこういう労の多い仕事をする人ほどまともなため、世間一般でのブリミル教への評判は意外なほど高かったりする。

助祭

教会の下っ端。司祭、司教の補佐役。ただし、本当の下っ端ではない。

奉仕者

聖職位階から外れている本物の下っ端。教会や修道院の下男やメイド、警備のために雇われた傭兵などがこれに該当する。本職を別に持ち、無償で働く一般人も同様（清掃奉仕や聖歌隊など）。現実だと、いわゆる下級叙階はさらに細かく分かれているが、面倒なので気にしない方向で。

第6話 これだから政治と宗教は面倒だ（前書き）

切りが良いところで区切った結果、短めの次話ができそうなので、これを明日（2011年2月14日）、更新します。

第6話 これだから政治と宗教は面倒だ

「とりあえず戻りましょう。そのうえでサウスゴータ侯に、今の話を早急にお伝えするしかありません。その点は、ご理解いただけますか？」

そんな俺の言葉に頷き返してきたマチルダ様は、比較的素直に隠し通路へと俺を連れて行ってくれた。ただ、この時に向かう先は指定するべきだったと、あとになって後悔することになる。

「お父様！」

出た先は元の部屋ではなく、なんとサウスゴータ侯の謁見室だったのだ。たまたま来客がおらず、サウスゴータ侯がメイドにハーブティーを淹れさせていたところだったため大事にはならなかったが、下手をすればいろいろと厄介な事態が引き起こされていたかもしれない。

「！？　そうか、隠し通路の地図を」

「お父様、たいへんです！　シャジャル様とティファのことが！」

「マチルダー！」

怒声が響いた。空気が震えるほどの怒声だ。これにはマチルダばかりか、ハーブティーのポットを持っているメイドも驚き、カチャ、と音をたてるほどだった。

「……しばらく休憩する。誰も部屋に近づけないように」

サウスゴータ侯はメイドにそう命じると、その退室を待った上で

溜息をついた。

その上でマチルダ様の背後にいる俺に視線を向けてくる。

「どこまで聞いたのかね？」

「ご説明します」

まだオロオロとしているマチルダ様を一瞥した俺は、順を追って、俺の視点で見聞きしたことの全てを説明した。

「その後は倉庫を出て行かれました。内容が内容ですので、なにより侯爵閣下に御報告するのが一番と思い、マチルダ様をお願いして戻ってきた次第です。まさか謁見室に直接出られるとは思いませんでした……」

「いや、今回はむしろ、それでいい」

サウスゴータ侯は苦々しげに顔をしかめていた。

「話はわかった。ふたりとも下がちなさい」

「お父様……」

「いいから、下がちなさい」

「行きましょう、マチルダ様」

ここから先は子供の出る幕ではない。だが“シャジャル様”と“ティファ”を心配するマチルダ様は、なかなか言われた通り、部屋を出ようとしなかった。それでも手を握り、強引に引っ張り出すと、意外なほど素直に従ってくれる。わかっているが心配で仕方がない、というあたりが彼女の本音なのだろう。

「マチルダ様、今はお部屋で」

「シャジャル様はエルフなんかじゃない」

ポツリと、彼女がつぶやいた。

肝が冷えた。

周囲を伺う。誰もいない。よかった。

「エルフだけど、エルフなんかじゃ……」

「マチルダ様ッ」

少し強い口調で呼びかけると、彼女はハッと自らの口を手で塞いだ。

どうやら自分でも“話してはいけないことを話してしまった”自覚があるらしい。

「お部屋に」

「……………」

彼女はうなずき、うつむいたまま歩き出した。

手を離そうとしたが、ギュッと握られてしまい、離すことができない。

仕方なく、そのまま例の待っていると言われた部屋まで向かうことにする。

マチルダ様が再び口を開いたのは、部屋に入り、扉を閉めた直後のことだった。

「シャジャル様はエルフだけど、エルフじゃないの！」

「マチルダ様……」

「ティファだって半分はエルフだけど、全然、エルフじゃなくて……とても素直だし、笑うとすごく可愛いし、お父様のローデンにも最初は あっ、ローデンって、お父様の使い魔で、すごく大きい

狼でね、それで

「

矢継ぎ早にマチルダ様はあれこれと語りだした。

不安の裏返しだ。

俺は相づちをうちつつ、とりあえず彼女の話すことを頭の中でまとめてみた。

まず第一に。

シャジャルというのが大公殿下の愛人であるらしい。もっとも、そう告げているのは本人だけであり、むしろ周囲は“エルフに似ている人間”と思いこんでいるようだ。

性格がハルケギニアで言われているエルフとかけ離れているせいだ。

邪悪で狡猾、メイジよりも数百倍強く、人間すら食べてしまうという吸血鬼に匹敵する信仰の敵。ハルケギニアのエルフとは、そんな悪魔そのものを意味している。眠れない子供に“悪い子はエルフが食べにくる”などと言い聞かせることさえあるのだから、どこぞのナマハゲや闇の福音みたいな扱いだと思えば、ほぼ間違い無いと思う。

だが、シャジャルという女性は気弱で、優しく、ものすごく腰の低い人物らしい。

おかげで誰も彼女をエルフと見なしていない。

もし彼女がエルフならば、人間こそが本物のエルフだ　などと
言い出す人までいるほどなんだとか。誰とは言わない。大公殿下その人だとは、言わずにおこう。

そして娘のティファニア。いつもポーツとしているマイペースな女の子のようだ。

マチルダ様によくなつており、“お屋敷”に遊びに行くと、いつも服のどこかを掴み、小犬のようについてまわるのですごく可愛いらしい。ただ、帰る時になると涙ぐみながら「やだ」とぐずるのが玉に瑕だとか。一緒に歌をうたうのが好きらしく、

「それでね」

マチルダ様の独演会はソファーに座ってからも続いた。

俺は適当に相づちをうちながら、

（この事件……もしかしてジャ^うーウッド男爵家もまきこまれるんじや……）

嫌な予感を覚えずにいらなかった。

「そうね……サウスゴータ侯爵家ほどではないにしても、無関係とは言い難いわ」

同日の夜、サウスゴータ大聖堂から夕刻頃に戻ってきた母上は、サウスゴータ侯と長時間にわたって話し込んだあと、ようやく邸内に用意された部屋へと姿を現してくれた。俺はマチルダ様から聞い

たことも含めて改めて全てを語り、この騒動が我が家にもたらす影響について尋ねてみたのだが、

「ジャーウッド男爵家は平気よ。でも、お母さんの血筋が左竜頭派……今の大公殿下を支持している、アルビオンでも新教寄りの派閥に属しているの」

なにやら根っこは、想像以上に複雑なようだ。

「左竜頭派？ 新教？」

「今の国王陛下が即位される前にあった派閥の名前よ。

その頃の第一王子、今のジェームズ1世陛下を支持した正竜頭派、時の第二王子、後のトリスティン王国ライル13世陛下を支持した右竜頭派、

時の第三王子、今のモード大公殿下を支持したのが左竜頭派。

もともと、御三方のお父上であらせられるフィリップ陛下が、3人の王子を、アルビオンの象徴である“三頭の竜”になぞらえたことが始まりなんだけど……結果的に王位の継承をめぐって、それぞれの派閥で対立することになってしまったの」

「……えっ？ でも………」

「そう。前に少し話したけど、御三方とも、とても仲の良いご兄弟よ。でもね、周りは違ったし、どこにも所属しないなんて選択をできない時代もあったの。もちろん、派閥に忠誠を誓う人もいれば、どちらかといえばその派閥、みたいな立ち位置の人もいたわ。母さんの生まれた家も、そのひとつ。中立寄りの左竜頭派。他の2派に大貴族が集まりすぎたから、バランスをとる意味でそうしたってところが強かったみたい」

「……今も母上の生家は大公殿下に？」

「ええ。母さんの弟、あなたにとつての叔父が、大公殿下にお仕えしているわ」

「……母上に実害は出るのですか？」

「さすがにそれは無いと思うわ。ただ……東方の技術が、問題になるかもしれないの」

その言葉で、ふと、もうひとつの不可解な単語のことを思い出した。

「母上。新教というものも、そのあたりに関係しているのですか？」

「ふふふ。その通りよ、アーサー」

母上は満足そうにうなずきながら説明してくれた。

新教とは「実践教義」というものを尊重するプリミル教改革派の考え方らしい。信徒自身が“信仰に沿った生活”を行うことを重要としており、教会での礼拝や喜捨を重要視していない点が一番の特徴となっている。

つまり裏を返せば、教皇庁や教会の腐敗、聖職者の墮落への反発心が形になったものと言える。アルビオンはかなりマシだが、教皇庁のお膝元であるロマリアでは、異端認定をちらつかせた聖職者が酒池肉林の贅沢三昧を繰り広げているらしいし。

教皇庁にもこうした現状を憂う者たちがいるため、新教そのものが異端に認定されたことは無いらしいが、新教派の聖職者が別件で処罰される事例は毎年のように起きているそうだ。

そうした中、若き日の大公殿下はアルビオン国内の新教派聖職者を庇ったそうだ。

理由は“なにも間違ったことをしていない”から。

実際にそうだったらしく、その聖職者の冤罪が晴らされることになり、以後、大公殿下は新教信徒や新教派聖職者から慕われるようになったそうだ。

もつとも、その代償としてアルビオンの大司教座には教皇庁から差し向けられたコテコテの保守派しか就けないようになってしまったらしい。教皇庁でもアルビオン出身というだけで出世できなくなり、王家に対する喜捨の求めも、トリスティンやガリアに比べると頻度や金額が増えることになったそうだ。

つまりまあ、大公殿下は若き日にもやらかしてしまったというわけだ。

「あつ。もしかしてペトロ様が……」

「ええ、そうよ。大公殿下が助けになった司祭様こそ、ペトロ様なの。教皇庁の若い聖職者の間では絶大な支持を集めている御方よ。それだけに、次期教皇の座を狙っている今の司教は無下に扱えないのよ」

次の教皇選挙は早くても10年後あたりらしい。だが教皇庁にいないアルビオン大司教にとっては、今の内から動かないと間に合わない時期に入りかけている。だからこそペトロ様の支持は、是が非でも欲しいところなのだそうだ。

「母上。最後にもうひとつだけ」

「なにかしら？」

「もし……このまま事態が明るみに出てしまえば、どうなりますか？」

母上は眉を寄せ、首を軽く左右にふった。

「最悪の展開になるわ」

その言葉は思っていた以上に深刻そうだった。

「おそらく陛下も、殿下も、事を大きくしたくないとお考えのはずよ。でも、周りがそれを許してくれない……なにより教皇庁が黙っていないわ。最悪、アルビオンそのものが異端の認定を下されてしまふ危険性だってあるもの。国王陛下は王国のためにも、苛烈な対応をとるよう、迫られてしまう……」

母上は目を閉ざした。

「おそらく大公殿下と愛妾様、それに直臣の多くが一方的に処罰されるはずよ。教皇庁の手前、その断罪は理不尽に見えるほど苛烈でなくてはならない。なぜなら王族が、信仰の敵であるエルフを匿っていたばかりか、エルフとの間に子供まで作っている……そんなことは絶対に許されない。もし許してしまえば、始祖ブリミルの教えが根底から覆されてしまふ可能性もあるわ」

「そうとは思えません。いくらエルフが始祖ブリミルの敵だからって」

「だからこそよ。前にも話したと思うけど、ハルケギニアにおいて始祖ブリミルの時代こそが完成された理想郷そのもののなの。エルフ

はその時代の宿敵。これを否定することは、始祖ブリミルが間違っていたことにつながりかねないわ。だからこそ教皇庁は絶対に許さない。保守派だけじゃない。新教派にしても、許せる事ではないの」

これだから宗教は嫌いだ。というか、現代日本人が適當すぎるのか？

まあ、それもそうだろう。

なにしろ「修行しないと救われない 阿弥陀仏にお願いすれば救われるZE！ いや、お願いしなくても救ってくれるくらい器がでかいに決まってるだろゴルァ！」なんて理屈が受け入れられるようなお国柄だし。ほんと、フリーダムすぎるようなあ、日本の仏教つて。結果的に回帰した禅宗も隆盛するあたり、やりすぎたと思ってる人もそれなりにいたようだが。

「つまりね、事態が露呈したら、国王陛下は大公殿下とその一派を断罪しないといけないの。それも一方的に。できるだけ理不尽に。そうすることでしか、教皇庁を抑えることはできない。でも、国内の貴族にはしこりが残るはずよ。かつての左竜頭派のすべてを断罪できるわけでもないし……そのしこりが、将来、王家の不信につながる可能性もあるわ」

本当にそうだろうか？

王家は始祖の末裔。その王家に弓を引くことは、ブリミル教に対する挑戦にならないだろうか？ そんなことを貴族が……いや、貴族と教皇庁は別物か。

なるほど。母上の見立てで言えば、国王陛下が一番危惧しているのは“アルビオン王国に他国が軍事侵攻する可能性”だってことなのだろう。

確かに浮遊大陸アルビオンは、新興勢力である帝政ゲルマニアや四大国屈指の国力を誇るガリア王国にしてみれば、奪い取れるなら奪い取りたいおいしそうな狩り場のはずだ。少なくとも大義名分があれば、両国とも自重することなど無いと言い切れる。

アルビオン王国は、この侵攻を止められない。

異端認定などされてしまつては、国内をまとめあげること也不可能だ。そうでなくとも国力の差が大きすぎる。母上から聞いている話を総合すれば、今のハルケギニアは四大国と言いながらもガリア王国と帝政ゲルマニアの二強にアルビオン・トリエステン連合と教皇庁を要するロマリア連合皇国がどうにか追従している状態にあるらしい。だとすれば、他国の侵攻を挫くことにこそ精力を傾けなければならぬことになる。

だからこそその国内不和の容認、ということか。

厄介だ。ジャーウッド男爵領にとって、王国に内乱の芽ができてしまつなんて、厄介どころの話ではない。だとするなら……いや、でも……だがしかし………

「……母上」

俺は意を決して、母上に語りかけた。

「母上は、どうしたと考えていますか？」

「……あなたは、どうしたいの？」

「わかりません」

それが率直な気持ちだ。

「でも……」

脳裏をよぎるのは、ティファニアのことを延々と語ってくれたマ
チルダ様の姿だ。

「助けられる命があるなら、助けたいと思います」

「……助けられるの？」

俺は母上の目を見返しながら、はっきりと、こう告げた。

「はい」

王国に忍び寄る波乱を消し去る手段 俺には、それがあ
るのだから。

第6話 これだから政治と宗教は面倒だ（後書き）

補足1：新教について

完全捏造設定です。教義的な部分は福音主義に近いものの、原作を読む限りルター的な人物が現れたわけでもなさそうなので、自然発生的に生じた改革派の別称という形にしております（対抗宗教改革の初期段階に近い？）。

補足2：日本の仏教界がフリーダムすぎる件

厳密には本文に書かれていることは上っ面を撫でた程度です。でも大嘘でもないあたり、やはり日本の仏教界はフリーダムすぎると思う。

第7話 魔法世界のナマハゲはやっぱりすごい（前書き）

次話は土曜日（2011年2月19日）に。

第7話 魔法世界のナマハゲはやっぱりすごい

事は単純だ。 エルフであることを隠せばいい。

「母上。エルフである以上、ブリミル教に改宗しても事態は収まらないんですよ？」

「……ええ、無理だと思うわ。エルフである限り」

「だったらエルフであることを隠してしまえば？」

「無理よ」

母上は首を横にふった。

「大公殿下たちはシャジャル様の性格を見て、エルフではないと思いきんでいたけど……疑う者にとっては“耳が長い”というだけで充分すぎるわ」

フェイスチェンジ
「【顔変え】は？」

風と水のスクウェアスぺルに【顔変え】フェイスチェンジというものがある。文字通り、顔の形を変えてしまう魔法だ。これで耳を隠してしまえば

「いいえ、誰だって最初にその可能性を考えるわ。だから必ず衆目の前で【探知】ディテクトマジックをかけられることになるはずよ。そうなれば、【顔変え】フェイスチェンジの魔法具を使ってもバレてしまうわ」

「二重に掛ければ？」

「二重に？」

解除しても別の部分が変化するだけ といった小細工はどうだ

ろっ？

「……いえ、そもそも【フェイスチェンジ顔変え】で姿を偽っていないかどうかを調べる”ための【ディテクトマジック探知】だもの。そこで黒と出てしまえばお終いよ」

小細工は無理か。まあ、それもそうか。

「だったら、【ディテクトマジック探知】でもわからない魔法を使えば？」
「そんなものが」

母上が目を輝かせた。

「あるのね？」

「はい」

「どういうもの？」

「部分変装薬というものがあります」

『魔法先生ネギま！』に登場する年齢詐称薬の下位版だ。神鳴流の稽古中、もう少し体が大きくなればと思い、ダーク・エヴァンジェル“闇の福音”の年齢詐称薬について調べたことがあったのだ。もつとも、工房造りから始める必要があったため、早々に諦めたという経緯があったりする。

「それは確実に【ディテクトマジック探知】でわからないのね？」

「実際に確かめる必要があるけど、かなりの確率で」

『ネギま』世界における最強種の一角、ハイン・デイルイト・ウオーカー“吸血鬼の真祖”であるダーク・エヴァンジェル“闇の福音”ことエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの変装薬は、原作において、魔法世界という“幻想”が実体を伴っていたのと同じような仕組みで肉体そのものを別のものに置き換えてしまいうちートな代物だ。

最大の特徴は魔法探知に引っかからないところ。

細かいところを言えば、通常の変装薬が外側に展開した術式で本人を囲むのに対し、エヴァンジェリンの変装薬は、本人の内側で術式を展開、押し広げる形で姿を変えるところにある。その際、本人の肉体は、少し次元のずれたところに引き込まれるため、上位の年齢詐称薬になると、体そのものを小さくすることさえ可能になる。

もちろん、魔力を消し去ることまではできない。だが、この世界でもメイジであれば、誰でも魔力を備えている。そして、特殊な幻術とはいえ、異世界の魔法、それも魔法探知を妨害する効果まで併せ持った魔法を、この世界の魔法で感知することは難しいと思われる。

「　　という感じなんだけど、どうかな？」

「そうね」

母上は立ち上がった。

「騒ぎが広がれば、ようやく手に入りそうな正統認定も無かったことにされかねないもの。我が家のために、やってみる価値はあるはずよ」

もともと、大公殿下自身が、この策を受け入れてくれないと話にならない。少なくとも工房を構えるには資金と建物が必要になる。試してみないことには、どれほどの金と時間が必要になるのかわからない。おまけに用いる技術が技術なので、第三者に手伝わせるわけにもいかない。

ええつと……神鳴流をガンダールヴの技にしたから、ネギま系錬金術は、始祖ブリミルを智恵で支えたという“神の頭脳”^{ミョズニールン}の技って感じか？ まあ、細かいことは母上と相談して決めるようにしよう。異端認定さえどうにかできれば、なんとわれようと問題は生じないだろうし……

サウスゴーティウムから離れること半日、周囲を麦畑に囲まれるこじんまりとした屋敷が、工房として用意された建物だった。

「表向きは病弱だったアーサーが体調を崩したため、回復するまでこの地に残って療養していることにした。錬金術に必要な器材や材料は、エレナが私に頼み込み、買い求めたことにしてある。私は2人を邸宅に招きたかったが、エレナがそれを固辞したため、エレナの求めに全て答えている形にした。これでどうだ？」

母上から俺の案を聞き、即日、太守殿下から了承を取り付けてきたサウスゴータ侯は期待に満ちた目で俺と母上を屋敷に案内してくれた。

「そうね……問題は、私自身が霊薬を作れないことかしら？」

「そこまでは気にする者もないだろう。なにしろ君は“百枚舌”だからな。自力でなんとかしようとしているとしても、疑う者はいないさ」

「……クロードお兄様とは、いずれしっかりと話し合う必要がある
そうね」

「ははは。気の強さはいつまで経っても変わっていないな」

などという大人の会話はさておき。

工房となる屋敷に入った俺は、早速、【幻想の叡智】に籠もるところから始めた。最初の数日は、とにかくにも知識を漁りまくり、必要最低限の実験器具に目処をつけ、それを母上に絵付きでお願いし、サウスゴータ侯に仕入れてもらうことに終始したのだ。

不幸中の幸いだったのは、この世界にも錬金術があり、かつ基本的な器具類に共通したものが多かった点だ。もともと、材料のほうはそうもいかないため、似ていそうなものを取り寄せては試験を繰り返すハメに陥ったのだが。

結果、ワイバーンの血のみを材料とし、術式だけで効能を整えることにした。

他にも術式を通して浄化した水や若干の貴金属も使用する。

ただ、作業の大半はガラス製の器具そのものを自分で作ることに費やされた。

特にカリカリとルーンを刻んでいく作業が、思いの外、たいへんだった。

「アーサー、手伝えること、ある？」

「……ごめん。ありがとう」

「うっん、いいのよ。この世界には存在しない知識なんだって、見ているだけで母さんにもわかるから」

さもありあん。

恐るべしはエヴァンジェリンの錬金術。原作では“南の島に引きこもっていたことがあった”となっているが、そうした時期にいろいろと研究していたのだろう。最大の特徴は、わずかな材料を術式だけで変えていく技法に秀でているところ。【闇の魔法】^{マギア・エレベア}などの特殊な術式を開発した吾人だ。その知識と技術を秘薬作りに応用しているのだから、それくらいのことは朝飯前なのかもしれない。

もつとも、年齢詐称薬のような高度な秘薬になると、術式だけではどうにもできない領域に入ってしまう。少なくとも現状では、『ネギま』世界でも貴重とされる材料を集めなければ作り出せそうにない。逆に言えば、材料さえあれば“外見年齢自由自在”なうえに“猫耳や猫尻尾を付随することも可能”な秘薬を作れるわけで……本当、エヴァンジェリンは存在そのものが規格外すぎる。伊達に魔法世界でナマハゲ扱いを受けてたわけではないらしい。

閑話休題。

たとえ年齢詐称薬の前段階、そこに至る途中で生まれた部分変装薬であっても、エヴァンジェリン流の高度な知識と技術が必要とするのだから、そう易々と実現できるものでもない。それでも【幻想の叡智】という参考書を持ち、【無窮の才能】というチートな理解力&成長力を備えているお陰で、何度も何度も失敗を繰り返しながら、ついに

「……できた」

開始から約1ヶ月後。ついに想定通りの試薬反応が出てくれた。

今回はまず“耳を人間のものに変える”ではなく“耳をエルフのものに変える”ものを作ってみたのだが、これで効果が出れば、術式の一部を書き換えた本薬を精製、最後の試験を大公殿下の愛妾と愛娘、それぞれに試してもらおう段階に入れる。

さて。

「んぐっ」

自分で飲んでみた。直後、ボウンと煙のようなものが耳元で生まれ、霧散した。

鏡を見してみる。

成功だ。少し伸びた俺の黒髪から、ちゃんと長い耳の上端が突き出ている。

コンコン、コココン

扉をノックする音が聞こえてきた。母上だ。

「お帰り、母上」

魔法で開けられても大丈夫のように、扉の前に置いてある巨石を横へとズラして、内側から鍵を開けた。

「ただいま、アーサー。調子……は……」

母上は俺を見るなり、目を丸くした。
俺は得意満面で、尋ねてみる。

「どう？ エルフの耳、見えてる？」

「……で、できたのね！？」

「まだだよ。まずは【探知】^{ディテクトマジック}。その次は」

母上は素早く腰からタクト型の杖を抜き取り、ルーンを唱えだした。

「^{ディテクトマジック}
【探知】！」

俺はグッと口元を引き締め、母上の言葉を待った。
母上はジッと俺を見つめ、

「……………ふう」

ほどなくして吐息を漏らし、ニコツと微笑んできた。

「母さんにはわからないわ」

「よしッ！」

これで第二関門はクリアだ。

その後、同じ工程で簡単に作れる解除薬を飲んだ上で、エルフ耳
化変装薬、人耳化変装薬、変装解除薬をそれぞれ精製した俺は、同
日の夜、隠れるようにしてサウスゴータ侯爵邸に向かった。

「できる限りのことはしました。あとは実際に試してください」

「……わかった。朗報、期待してくれ」

あとになって知ったが、この頃にはもう、王都で愛妾と愛娘のこ
とが噂になっていたそうだ。噂はすでに大司教のもとにも届いてお

り、遠からず国王陛下が大公殿下を呼び出し、2人を御前に連れてくるよう命じるだろうと目されていたらしい。

だが

第8話 その時、歴史が動いた

INTERLUDE / SIGHT : ハヴィランド

宮殿 謁見の間

王宮は騒然としていた。

大公殿下はエルフ女性を愛人とし、あまつさえ、その愛人との間に娘まで作った。

そんな噂が流れている中、この1ヶ月ほど、病氣療養を理由に登城しなかった件の大公が登城したのだ。

しかも、単身での登城ではない。

老大公には、しずしずと歩く魅力的な女性と、幼い少女を抱きかえたサウスゴータ侯が付き従っている。

少女も、女性も、共にマントのフードを目深く被っているため、顔を確かめることはできない。

だがここに来て2人が何者かなど、改めて問いただすような者は誰もいなかった。

事実、謁見の間に大公が辿り着いた頃には、宮殿内にいる多くの貴族たちが待ちかまえていた。名目上はいつもの朝礼だが、その雰囲気はすでに大公たちに対する査問会的なものに変容していたのだ

……

「……………」
「……………」

赤絨毯の上を進む大公は何も語らず、玉座に座る国王も何も語らない。

モード大公ジョージ・テューダーは玉座の前につくと、片膝をつき、臣下の礼を示した。

「長らくお暇をいただいたこと、深く陳謝いたします」
「うむ……」

形式上、こうして謁見の間で国王と会話するのは非礼にあたるが、モード大公は王弟でもあるため、それをとやかく言い出す者は誰もいない。国王自身も、この場のやりとりを“国王と大公”ではないと示すために、多少型破りではあったが、あえて名前で呼びかけることにする。

「ジョージ。体のほうは、もう良いのか」
「はい。おかげさまで政務に戻ることができます」
「そうか……」

国王は細めた目を大公の背後へと向ける。そこには膝をつく女性と、サウスゴータ侯におろされ、女性と侯爵の間で両膝をついている少女がいた。

「つきましては」

大公自らが口火を切ってきた。

「それがしが休んでいる間、あまりよろしくない噂が流れていると耳にしました。ゆえに非礼とは思いましたが、大勢が集まる朝礼の場において、不適切な噂を払拭したく考えております」

「おお……そうであつたか」

国王は安堵の笑みを浮かべた。

「では、紹介してもらおう」

「はっ さあ」

モード大公は中腰で横にズレ、女性と少女に挨拶を促した。

女性は自らの手で、少女はサウスゴータ侯の手で、フードを外していく。

誰かがゴクリと唾を飲み込んだ。

その直後、

おお……………

感嘆の声があがった。

金髪碧眼の見目麗しい二十代前半の女性が、そこにいた。未婚のため結び上げていない長髪は、彼女自身がマントの奥から両手で外に出すことで、極上の金細工のようにサラリとその背に広がっている。

少女は、そんな女性によく似ていた。まだ年の頃は3、4歳だろう。顔をしかめているように見えるのは、緊張した結果なのだろう。この年頃の少女にしては、騒がないだけ、かなりしっかりしている

と言える。

「これはシャジャル、この子は私とシャジャルの間にできたティファニアです」

「ほう……なかなか美しい」

「ふたりとも、耳を」

大公の言葉で再び謁見の間に緊張が走る。

だが、シャジャルと紹介された女性が髪をかきあげると、そこに現れたのは、どうということのない普通の耳だった。もちろん、サウスゴータ侯に髪をかきあげてもらったティファニアという少女のほうも、耳の先が尖っているようなことはない。

「これで噂が偽りであることを証明できたと思いますが、いかがでしょうか」

「うむ、確かに」

と、国王が認めようとした、その時だった。

「お待ち下さい」

異論を唱える者がいた。謁見の間にいる全員の視線が、声の主に集まる。

最前列に位置する中年の貴族男性だった。

フェスタ侯爵ガイ・ベステン。

ハイランド地方でも屈指の大貴族であり、2隻の飛行艦船を王軍に供出していることで多大な発言力を持つ有力諸侯のひとりだ。

「陛下。大公殿下が証明と口になされた以上、ここは余人のよから

ぬ噂を一掃するべく、この場で、魔法による確実な証明を行うのが筋と存じ上げます」

この発言に頷く貴族が多数、顔をしかめる貴族が少数いた。さもありません。

ことはエルフに関わることだ。【顔変え】フェイスチェンジで誤魔化されていた場合、教皇庁が難癖をつけてきた時になにを言われるかわかったものではない。

もつとも、

「陛下。フェスタ侯の言い分は至極もつとも。お沙汰を」

当の大公は、慌てた様子もなく、スラスラとそう言うてのけていた。

ザワめきが起きる。

まさか……………

ではあの話は……………

いや、落ち着け……………

ザワめく貴族たちを鎮めたのは、疑念を口にしたフェスタ侯だった。

「陛下、よろしければ臣にお任せください」

ザワめきがピタリと止まる。

国王は王弟を見た。

大公は兄王を見返しながら、小さくうなずき返していた。これを見て、国王は決意を固めた。

「よかるう。 フェスタ侯、任せる」
「御意」

立ち上がったフェスタ侯は

「ジェリド伯、検分を」

少し離れたところで控えていた若い貴族に声をかけた。
再びザワめきが起きた。

立ち上がったのは王都では知らぬ者はいない赤毛の貴公子 ジ
エリド伯爵ジークフリード・マイセンだったのだ。

いわゆる帝政ゲルマニアが現在の規模まで拡張する以前に亡命して
きた旧ゲルマニア地方系の若手貴族。まだ18歳という若さながら、
すでにスクウェアメイジとしての実力を持ち、“しゅつがん驚眼”の二
名すら持っているアルビオン竜騎士団の竜騎士でもある。

その眼は全てを見通し、背後から襲いかかったところで返り討ち
にあうと言われている新進気鋭の実力者。おまけに【探知】ディテクトマジックの腕前
は一級品。それによって、本来なら【探知】ディテクトマジックで感知できないはずの
先住の魔法すら見破り、効率よく討伐任務をこなしていくことでも
知られている人物だ。

そんなジークフリード・オブ・ジェリドが検分役を担う。

確かにこれならば、魔法により姿を変えていた場合、必ず露呈す
る。

逆にいえば、彼にも魔法が感知されなければ、大公の言が正しか
ったことになる。

「
ディテクトマジック
【探知】」

ルーンが結ばれた。

ジェリド伯は琥珀色の瞳でシャジャールとティファニアを見つめ続けた。

静寂な謁見の間を包み込む。

その静けさは、ふう、というジェリド伯の吐息によって破られた。

「魔法は使われておりません」

彼の声が響き渡る。と同時に、フェスタ侯が芝居がかった様子で声を張り上げた。

「これはなんたること！ 王弟殿下とあろう御方が……………はあ？」

数瞬遅れて、ジェリド伯の言葉が脳に届いた。

視線をジェリド伯に向ける。

赤毛の貴公子は、ただでさえ鋭い目つきを訝しげに細めていた。

「…………ジークフリード・オブ・ジェリド」

声をかけたのは国王その人だ。

「重ねて問う。【^{フェイスチェンジ}顔変え】などの魔法は使われていないのだな？」

「はい、国王陛下。魔法は一切使われておりません」

「相違ないか」

「相違ございません」

「貴殿は我が国でも屈指の騎士^{シュバリエ}。魔法で姿を変える平民メイジの犯罪者を幾人も検挙したことは、余もすっかりと覚えておる。その貴

殿の【探知】を欺ける魔法が、この世にあると思うか？」

「傲慢との誹りを恐れずに申し上げれば、魔法に頼る以上、それが先住の魔法であろうとも、私の目を欺くことはできぬと自負しております」

「うむ。では」

「お、お待ち下さい！」

焦ったフェスタ侯が声を張り上げた。

「その女は間違いなくエルフです！ その女を買った奴隷商人が実際に」

「僭越ながら！」

サウスゴータ侯が大声を張り上げ、フェスタ侯の言葉を遮った。

「よい。クロード・オブ・サウスゴータ。申してみよ」

国王はサウスゴータ侯に発言の優先権を認めた。これではフェスタ侯と言えども、改めて邪魔するのは不敬になってしまう。

「はつ。僭越ながら国王陛下に申し上げます。只今、フェスタ侯が申し上げました通り、こちらにおられる女性はメイジでこそありますが、生まれは一介の農民にございます。生地はガリアとゲルマニアの国境、サハラに近い、どこにも属さぬ農村だとか。ただこの器量ゆえ、奴隷商人にさらわれ、そこで作り物の耳を、決して剥がすことのできない秘薬を用いてつけさせられたとのこと。その後、幾人かの奴隷商人の間を転売されてゆき、ここ、アルビオンに運ばれてくる際、大公殿下が保護した次第にございます」

「ほう……付け耳を……」

「俗な言い方になりますが、“ただの生娘”より“エルフの生娘”のほづが高く売れると、そのような考えがあつたようです」

「陛下」

今度は大公自らが言葉を継いだ。

「それがしがシャジャルと出会つたのは7年前、ビットリーニ3世教皇聖下の在位30周年記念式典の帰りのこと。たまたま臨検した飛行艦船が奴隷商人のものであり、そこにエルフの女性としてシャジャルが捕らえられておりましたことが縁になっております」

大公の声は朗々と謁見の間に響き続ける。

「平民を側におくなど、王族として誉められたことはありませんぬが……それがし、一目惚れいたしました。ゆえに密かに引き取り、時間をかけて付け耳を外し……シャジャルの身分ゆえに公におおやけすることができず、こうしてあらぬ噂を広めてしまいました。お騒がせ致しましたこと、ならびに王族にあるまじき振る舞いに出ましたこと、この場を借り、深くお詫び申し上げる次第です」

大公は頭を下げた。シャジャルも、サウスゴータ侯もそうだ。幼いティファニアだけはキョトンとしていたが、大人たちの真似をし、頭を下げつつ左右の母親とサウスゴータ侯をチラチラと見ていた。

「うむ。謝罪を受け入れよう」

国王はニヤニヤと笑いながら視線を動かさず、フェスタ侯の様子

をうかがってみた。

フェスタ侯は口をパクパクさせるだけで、もう何も言ってくる様子が無かった。

（こやつだったか……）

国王は表情こそ一切変えなかったが、胸の内は苦々しい思いでいっぱいだった。

今回の件に黒幕がいることは、国王も気づいていた。なにしろ噂の内容が内容だ。王族がエルフと情を交わし、あまつさえ子供までいるなどとなれば、国が傾くどころの話ではない。それほど火遊びをする以上、噂を広めた張本人は大それたことを考えていたはずだ。

おそらくは 王位の篡奪。

実際には王子の傀儡化が狙いのはずだ。だが、それを為すためにはジェームズ1世の退位が必要であり、それ以前に後見人の最有力候補であるモード大公を排除しておく必要がある。なにしろ王弟にして財務監督官、アルビオン王国唯一の大公でもあるのだ。そんな人物を差し置いて、他の者が王子の後見人になれるわけがない。

ゆえにまず、モード大公を排除する。

次にジェームズ1世。

そうなれば有力な大貴族なら、対応次第で新王の後見人になれる機会が生まれる。

（いや、フェスタ侯とは限らぬか）

かつての正竜頭派、または右竜頭派の誰かが仕掛けた可能性もある。王位の継承を巡る争いは、当人たちが最初から納得づくであったにも関わらず、水面下で激しく行われていたと聞いている。その時の恨み辛みが消え去ったとは到底思えない。

左竜頭派を恐れる正竜頭派が動いた可能性は捨てきれない。

再起を夢見る右竜頭派が動いた可能性も否定できない。

さらに言えば。

新教親派のモード大公自身を嫌う教会保守派が暗躍した可能性も

……

加えて、こうした水面下の出来事を、誰一人としてジエームズ1世に教えてくれようとしない。“王は清廉潔白であるべき”。そんな想いが、国王の手足を縛っているのだ。

（おかげで迂闊に動けずにいたが……）

もし噂が真実なら、たとえどのような理由があろうとも処罰するつもりでいた。エルフの恐ろしさを考えれば、すでに大公が“狡猾なエルフの操り人形”になっていた可能性すらあるのだから、国王としては、処罰以外の判断を下せなかった、というのが真相なのだ。

ただ、その場合は国外に逃走してもらおう腹づもりだった。公になつてしまえば投獄するしかなくなり、投獄してしまえば獄死させなければならなくなる。生かしてしまえば教皇庁が納得しない。さりとて処刑すれば国が割れる。だが投獄した時点で左竜頭派が動くはずだ。そうなれば結果的に、左竜頭派も罰するしかなくなり、王国には致命的な火種が残ることになる……

しかし、噂が真実だった場合、それ以外の選択肢は無いのだ。
ゆえに国王は動けなかった。

だからこそ、下手に動いて大公の登城を早めることだけは避け続けていたのだ。

（時間を稼ぐことしかできなかったが……）

噂が真実だったにしろ、偽りだったにしろ、大公と左竜頭派はうまく立ち回ることができたらしい。今はただ、その結果を安堵しておくべきなのだろう。

「さて……そうなると問題は、処遇についてか」

国王は頭を下げたままの大公たちを眺めながら、ふむ、ともう一度だけうなった。

「ジョージ。ダイアナが始祖ブリミルの御許に旅立って、どれくらい経つ？」

国王は他界した大公妃のことを尋ねた。

「15年になります」

「他に4人ほど愛人がいたはずだが、いかがした？」

「9人とも良縁に恵まれ、すでに他家の者となっております」

（……どうして兄弟の中でおまえだけはそうなんだ？）

アルビオン三王子のうち長男の国王自身と次男の現トリステイン国王ライル13世は、ただひとりの女性しか愛せない不器用な男だ。ところが次男のモード大公ジョージだけは、昔から女性にだらしが

ないというか、節操が無いというか……

(まったく……)

思わず心の中でツッコミをいれてしまう国王だったが、

「……………」

ふと、サウスゴータ侯の姿が眼にとまり、

(……うむ)

あるイタズラを思いついてしまう。

「では今現在、おぬしが愛を捧げているのは、その女性、ただひとりということだな？」

「はっ、その通りにございます」

「では サウスゴータ侯」

「はっ」

「シャジャルを養女とせよ」

(((((……えっ？))))))

謁見の間にいる全員が、心の中で声をあげていた。笑っているのは国王ただひとり。それ以外は、大公、シャジャル、サウスゴータ侯という当事者を含め、全員、理解不能と言いたげな表情を浮かべている。

「なに。愛妾とはいえ王族のそれになる者が平民というのは外聞に

悪い。だが、侯爵家の養女であれば、一応の形にはなる。無論、正妻にすることは禁じる。娘の立場も侯爵養女の娘とし、大公家を継がせることを禁ずる。大公家そのものも、ジョージの死を持って閉じることにする」

つまりティファニアには王位継承権が生じないとする厳しい沙汰だった。もっとも、王族が国王の許しもなく平民との間に子を為し、それを何年も隠していたというのだから、これでもまだ軽い処罰と言えるだろう。

「ジョージ。異論無いな？」

「ご温情、痛み入ります」

大公は深々と頭を下げた　　が。

「へ、陛下ッ!？」

サウスゴータ侯が素っ頓狂な声を張り上げた。

「そ、それは、私に大公殿下の義父になれと、そう仰るのですか!？」

「うむ」

国王陛下、神速の首肯。

ぷっ

誰かが吹き出した。

大公は56歳。

サウスゴータ侯は35歳。

年齢的にも、立場的にも、これほどありえない親子はそう無いだろう。

「そう言うことらしい！」

大公がニコヤカに声を張り上げた。

「これからよろしく頼むぞ、義父上！」
ちちうへ

今度は大勢がブハツと吹き出した。不敬極まりないが、国王も辛うじて声だけは堪えているものの、腹を押さえ、軽くうつむきながら、肩を振るわせている。フェスタ侯の一派だけが呆然としているが、それ以外は派閥の別なく、誰もが笑うしかない状況だ。直前まで深刻どころではない噂の真偽を確かめようをしていただけに。

正史では。

後に成長したプリンス・オブ・ウェールズが、王党派のため、空賊のフリをしていたことがある。確かに策としては悪くないが、王子自身が従軍する必要はない。というより、海賊船長の扮装までしていたのだから、かなり乗り気でいたともいえる。王子としては、かなり困った振る舞いだ。

アルビオン国王ジェームズ1世は、そんな王子の父親であり。

モード大公ジョージは、そんな王子の叔父にあたる。

正しく、王子はアルビオン王家の血を受け継いでいたとも言えるわけだ。

「ち……ちちうへ……？」

情けなくも呆然としたクロード・オブ・サウスゴータのつぶやきが、謁見の間の笑いをさらに大きなものにするのだった。

I N T E R L U D E / C L O S E

第8話 その時、歴史が動いた（後書き）

補足その1：「正史では」

「オリジナル設定だらけの本作が原作と同じ流れをたどるとすれば」という意味です。本作執筆の原点、筆者の妄想そのものを意味していると考えても間違いありません。つまりまあ……単なる屁理屈？（苦笑）

第9話 見つめる先は（前編）

結論からいくと、部分変装薬による偽装はうまくいったらしい。また“少なくとも1日以上は持続している”ことがわかつているため、追加の部分変装薬を精製したところで工房の器具類はすべて粉微塵に壊させてもらった。

なにしろ部分変装薬の秘密は、絶対に守らなければならないのだ。

下手に存在がバレれば、再びエルフ疑惑が騒がれてしまう。ゆえに、サウスゴータ侯には俺が作ったということも絶対に漏らさぬよう、厳重にお願いしてある。大公殿下にも秘密にするという徹底ぶりだ。というか、いろいろと迂闊すぎる大公殿下のことだ。知られてしまった時には、なんの脈絡もなく俺を呼びだし、盛大に誉めるなんてことをやりかねない。そんなことをされては、国情安定のために危ない橋をわたった意味が無くなってしまう。

「ところが絶対に秘密にするからと……土下座までされたのだよ」

部分変装薬の精製成功から8日後　ようやくサウスゴータ侯にムに戻ってきたサウスゴータ侯は、どこか疲れ果てた様子で秘密の工房を兼ねる屋敷まで来ていた。名目上は回復してきた俺への見舞いだ。もっともこの様子では、どちらが病人かわかったものではないわけだが。

「エレナ、どうにかならないかな？」

「なりません」

母上はニコリと微笑みながら、キツパリと断った。

「大公殿下にはこうお伝え下さい。『本当に秘密にできると仰るならば、シャジャル様のことが外に漏れたのは何故ですか？』、と。あの方の無邪気さは美点でもあります。こうしたことにかけては欠点としか言いようがありませんもの」

「……まっただ」

サウスゴータ侯は、げっそりとした表情で項垂れている。

まあ、気持ちはわかる。

これまで仕えていた大公殿下の義父になった　そりゃあ、貴族なのだから、高貴な人のために無茶苦茶な養子縁組をすることもあるだろう。だがそれでも、今回の沙汰はいろいろな意味で急すぎる。

おまけに、ティファニア様の件が、かなり重大だ。

マチルダ様の義姪になられたティファニア様は、王族とエルフの血を半分ずつ受け継ぐという厄介な背景をお持ちになられている。前者は政争の火種、後者は異端の決定打。そりゃもう、戦略級政治的不発弾とも言っべきだろう。取り扱い注意どころの話ではない。

だいたい、王位継承権こそ失ったが、王家の血を引くことに変わりはないのだから、その点が厄介極まりない。おそらく王宮での栄達を願う貴族たちが、自らの息子との婚姻を願って動き出すだろう。だが、その身にはエルフの血も引いている。ゆえに他家には出せない。婿をもらうにしても、よほど信用のおける相手でなければ洒落にならない。

「そっだ！　アーサーをティファニア様の　」

「お断りします」

俺と母上は声を揃えた。

「そ、そう言わずに」

「お断りします」

再び声を揃える。　　というか、そこまでの義理がどこにあるというのか。

「クロードお兄様。私たちはそろそろ男爵領に戻らせていただきます。なお、今回の手間賃は、器具の残骸や余っている原材料を初めとする工房の残り物だけで手をうちます。ただ、もしもアーサーのことが他の誰かにばらした場合は……」

「わ、わかっている」

「大公殿下にも？」

「話さぬ」

「シャジャル様やティファニア様にも？」

「無論だ」

「……だったら、この話はもうおしまいですわ」

母上はニコツと微笑んだ。

ちなみに、部分変装薬の効果時間は、周囲に魔力が存在する環境でさえあれば、理論上、無制限だったりする。つまり仕組みそのものは、自然界の魔力を用いる先住の魔法と同じなのだ。

よって【探知】ディテクトマジックにも引つかからない。

おまけに解除方法も、解除薬を飲むくらいしかない。

これが『ネギま』世界なら、解除呪文も気にしなけりばならなくなる。だが系統魔法には解除呪文が存在しない。正確には、始祖ブリミルのみが使えたと言う伝説の系統特性、虚無のスペルに“練金の産物を消し去るスペル”があつたらしいのだが、そこまで気にしていたらなにも始まらない。

つまりどういふことかと言えば、予備の薬も差し出したのだから、もはや我が家がこの件に関わらなくても良くなつた、ということだつたりする。

「アーサー。母さんはペトロ様にご挨拶していくるわ。帰りに荷馬車も連れてくるから、運び出す荷物に抜けがないか、確認しておいてもらえる？」

「はい、母上」

「クロードお兄様、もちろん、帰りの費用も、そちらもちよね？」

「……はあ」

なにやら項垂れているサウスゴータ侯に同情心がわいてしまうのは、なぜだろう？

……そうだ。

ちよつと気になるから、いっそのこと……………

INTERLUDE / SIGHT : サウスゴータ
イウム近郊の馬車の中

「ところでクロードお兄様」

「なんだい」

サウスゴーティウムに向かう馬車の中、ジャーウッド男爵夫人エレナは並んで座るサウスゴータ侯爵クロードに向けて微笑みを投げかけていた。

「なにを企んでいましたの？」

「なんのことかな？」

「大公殿下がエルフの女性を囲う……そんな危険なことを、お兄様が黙って見過ごすとは思えませんわ」

「……………はあ」

クロードは深々と溜息をついた。

「いつ気がついた？」

「最初に」

エレナは即答した。これでクロードは観念したらしい。彼は目元を揉みながら、空いている左手でタクトを抜き取り、馬車を沈黙のルーンで盗聴不可能にした。

「商人だよ」

彼はつぶやいた。

「ガリアに出入りしているそうだ」

言われたエレナのほうはしばらく黙り込んだ。だが次第に、その目が見開かれていった。

「まさかッ」

「そのまさかだ」

「成り立っているのですか？ 人間と……エルフの交易が？」

「そうらしい」

「確証は？」

「シャジャル様が、そう仰おっしゃった」

エレナは絶句していた。それは今回の真実を知った時以上の衝撃だったのだ。

クロードはそんな妹弟子から視線を逸らしつつ、さらに言葉を重ねていく。

「シャジャル様の話によると、珍しい工芸品や芸術品などが取引き材料になるそうだ。代わりに商人は、ネフテスから上等な織物や日持ちのする食品なんかを仕入れている。市場に流れてる東方産の絹のほとんどが、そうした取り引きで得られたものらしい」

「……お兄様。ネフテスというのが、エルフの？」

「エルフの国だ。重要なのは、ネフテスにおける風石が“採掘するもの”ではなく、“生産するもの”だということだよ」

「……ようやく、納得が이었습니다」

エレナは表情を強ばらせながら、視線を逸らす兄弟子を冷ややかに見据えた。

「クロード・オブ・サウスゴータ。あなたの本当の狙いは左竜頭派の再興……それも大公殿下のお子であらせられるティファニア様を女王に即位させ、“エルフと同盟を結んだアルビオン王国”で権勢

を振るうこと。違いありませんか？」

「教会の保守派とやりあうんだ。それくらい必要だろう」

言い返したクロードの瞳には、それまで見せたことのない鋭さが宿っていた。

宗教都市サウスゴートイウムの太守にしてモード大公ジョージの直臣。新教擁護者ゆえに教会の本流から嫌われているモード大公の下にながら、保守派が要職を締めるアルビオンの宗教界において大司教と肩を並べている実力者。その正体は、忠臣でも愛国者でもなく、ごくごく普通の“大貴族”だったのだ。

「それとも今のアルビオンに、ゲルマニアと渡り合えるだけの力があるという気か？」

「トリスティンとの同盟が強固なのには？」

「ラ・ヴァリエール以外の穀倉地帯を奪われた国が？」

「頼りにならぬと？」

「ならんよ。穀倉地帯を奪われてからのトリスティンが、どれほど弱体化しているか知ってるだろ。逆に尋ねるが、血脈と伝統にしか自負心を見いだせなくなった連中など、どれほど頼りになるというのだ？」

そこにあつたのは、アルビオンに漂いだしている病理の結晶だった。

モード大公の新教擁護によって生じた教会保守派の嫌がらせそれはアルビオン貴族たちに“教会不信”という毒を広げることにもつながっている。これによりアルビオンでは、少しずつ、プリミル教の骨子と言える部分が揺らぎ始めているのだ。

原典至上主義に対する忌避感。

否定にまでは至っていない。だが、それまで至上とされていたことに対する反発心のようなものが育ち始めている。その最たるところが“王族に対する忠誠心の欠如”だ。これは他国でも起きていることだが、特にアルビオンでは、その風潮が強まりつつある……

「精霊石だよ、エレナ。風石で船を浮かべ、火石で暖をとり、水石で傷を癒し、地石で上等なゴーレムを使役する……ネフテスでは、それが当たり前だ。なぜなら精霊石は採掘するものではなく、生産するものだからだ。その技術を手に入れば、アルビオンはガリアとも……いや、ハルケギニアの全てとも戦える」

クロードは“百枚舌”と呼ばれている妹弟子に熱く語りかけた。

「わかるだろ、エレナ。教皇庁からの解放だ」

「そしてあなたが権勢を握る……と？」

「私以外に誰がいる。国王陛下も大公殿下もお優しくすぎる。プリンス・オブ・ウェールズもどうなるかわかったものじゃない。他の大貴族？ 論外だ。あいつらが見ているのはアルビオンの中だけ。ハルケギニア全体を見ている大貴族など私ぐらいなものだよ」

事実なだけに否定できない。なにしろハルケギニアは、この600年間、大きな変革を経験していないのだ。数少ない例外がロマリア連合皇国の誕生であり、帝政ゲルマニアの勃興であるが、それも“貴族間の権力闘争”の延長線上にある出来事と見ることが可能だ。

ゆえに誰も遠くを見ない。どうせ遠くを見ても、変わらないと思

えるからこそ。

ゆえに誰もが近視眼的になる。大局が不変であるならば目先のことに……と。

「エレナ、王都に戻らないか」

「……なにゆえに？」

「おまえの弟は良くやっている。だが、金勘定は得意でも、それ以外はからつきしだ。今になっても腹芸のひとつすらできない。あれではダメだ。私が大聖堂で動いている間、宮殿で動いてくれる人間が、どうしても必要なんだ」

「……ですわね」

今回の顛末が、まさに好例だ。

もし宮廷工作を得意とする人材がひとりでもいれば、エルフ疑惑そのものが問題視されずに済んだだろう。方法はいたって単純だ。謁見の間でサウスゴータ侯が語った通り、“平民の娘なので公に出来なかった”という噂を流し返すだけで良かったのだ。

だが、エルフ疑惑の噂のほうが主流になってしまった。フェスタ侯を初めとする、かつての正竜頭派が派手に動いた結果だ。狙いは王国の要職から左竜頭派を一掃すること。そして新しい正竜頭であるプリンス・オブ・ウェールズを担ぎ上げ、さらなる権勢を確立すること……

権力のためなら御輿に乗る王族すら簡単にすげかえる。すでにアルビオン貴族は、そこまで堕ちているのだ。

「アーサーを婿にする」

クロードは断言した。

「ティファニアが女王に即位したあと、必ずおまえの息子を婿として迎え入れる。エルフと外交する以上、王位はやれぬが、ただの男爵で一生を終わることはない。なんなら廃嫡扱いになるモード大公位を復活させてもいい。だから」

「協力しろと？ 面白いことをおっしゃいますね、クロード・オブ・サウスゴータ」

エレナは微笑みながらマントのポケットに手を入れた。

一瞬、クロードは身を強ばらせた。

だが取り出したのが一通の封書だと気づくと、訝^{いぶか}しげに眉を寄せた。

「なんだ、それは」

「手紙です」

「見ればわかる」

「ええ、そうでしょう。よくご覧ください」

エレナは封書を裏返し、丁寧に剥がされた封蝋が見えるようにした。

クロードの目が見開かれる。

封蝋に押されている指輪印は“目”を思わせる単純なもの。それを用いているのは

「まさかッ！？」

「武辺者には武辺者のつながりがありますの」

彼女は微笑んだ。

「見ての通りこれは ジークフリード・オブ・ジェリドからの返
信ですわ」

クロードの顔は、驚きそのまま凍り付いていた。

第9話 見つめる先は（前編）（後書き）

補足その1：シャジャルの謎と王族軽視の謎

実は本作の妄想の9割が、本話の部分で出来ています。『ゼロの使い魔』はラブコメファンタジーな世界なので、リアルなツッコミは無粋の極みというものですが、それでも「王族が宗教上の禁忌的な女性を妾にしたのに周囲が動かないのはどうだろう?」とか「クロムウエルが虚無だと偽ろうと王家に逆らうのはどうよ?」等、原作を読んだ時、気になったことがあったわけです。

おそらく何かしらの理由があるんだろうなー、とも思っていたわけですが、某無能王絡みの件、ティファニアに対する周囲の反応、ネフテスの描写で、ピキーンと脳裏に閃くものがありました。

この「ピキーン」ときた部分を書いてみたくなり、本作を書き始めた……というのが、本作です。

原作はあと3巻で完結だそうで……今後、いろいろと手直しが求められる可能性も無きにしろあらずだったりしますが、このまま「ピキーン」と来てしまった妄想を元に、とりあえずレコン・キスタの件までは書いてみようと考えています。最後までお付き合い頂ければ幸いです。

第10話 見つめる先は（後編）（前書き）

前話の続きです。ちょっとlongです。申し訳ない。

第10話 見つめる先は（後編）

封書をマントのポケットに戻したエレナは、絶句している兄弟子に畳みかけていった。

「なんでもジークフリード・オブ・ジェリドは、クロード・オブ・サウスゴータから、検分を頼まれた時に否定的な対応をしてもらえれば、竜騎士団の予算を増額するとの取り引きを持ちかけられた……と、記されておりますわ」

さもありあん。

謁見の間での【探知】ディテクトマジック その役目を、“しやうがん 驚眼”のジークフリードが担うであろうことは、最初からクロードも予想していたことだったのだ。

なにしろ今回の騒動は、最初からフェスタ侯の一派、アルビオン竜騎士団を初めとする王軍に強い影響力を持つ正竜頭派が絡んでいると目星がついていた。ならば、竜騎士団で最も【探知】ディテクトマジックを得意とする“驚眼”のジークフリードに白羽の矢が立つことは自明の理というもの。

ただ、“驚眼”のジークフリードは武辺者だ。王宮での栄達に興味はない。それでも竜騎士団員であることに誇りを抱いていることもまた有名である。そのため、取り引きを持ちかけるなら、竜騎士団に益が出る方向で動くしか無いのだが……

「もつともジークフリード・オブ・ジェリドは、私の夫と同じく、呆れるほどの武辺者ですから、当然、断られましたよね？」

事実だ。そもそも彼にとって権力闘争とは“面倒事”でしかないのだから。

ゆえに正竜頭派も、彼を検分役に起用した。

正統な理由に基づく要請であれば、ジークフリード・オブ・ジェリドという騎士が断るわけがないからだ。

「ところが、アーサーの部分変装薬は本当に【探知】ディテクトマジックをすり抜ける逸品だった。だからどうにでもなると判断した」

「……な、なにを言いたい？」

「クロード・オブ・サウスゴータ。本当に“驚眼”しゅうがんの【探知】ディテクトマジックをすり抜ける秘薬が、存在すると思いますの？」

その問いかけは、サウスゴータ侯を再び黙らせた。

エレナは封書を手にしたまま、感情のこもらぬ眼差しを、そんな兄弟子に向け続けた。

「普通の【探知】ディテクトマジックでは先住の魔法を感知できないことぐらい、ご存じのほうでは？ それなのに“驚眼”しゅうがんは亜人を感知できると言われていることに、なんの疑問も感じませんでしたの？」

エレナは目を細めた。

「彼の魔法はただの【探知】ディテクトマジックではありませんの。
本当の名は【魔力感視】センスマジック」。

火と風と水と地のスクウェアスperlですの。

彼の母方の血筋は【探知】ディテクトマジックを徹底的に突き詰め、ついに【探知】ディテクトマジックの亜種……いえ、最後のルーンが【探知】ディテクトマジックであることを除けば、正

真正銘、まったく別のスペルと言える【魔力感視^{センスマジック}】を完成させていますの」

「そ、それがどうした」

「気づかれていたと、そう申しておりますの」

「だ、だったらー！」

「ええ、彼は虚偽の報告をしました。我が子が受け継ぎ、我が夫も^{アーサー}
^{ロレン}学んだ“ガンダールヴの技を教わる代償”として、恐れ多くも国王陛下に嘘をつくことに同意してくれました」

クロードは混乱した。驚愕の事実だが、“それがどうした”と言える内容なのだ。

「……感謝しろと、そう言いたいのか？」

「エルフとの取引の件は予想外でしたけど、クロードお兄様が、王国の命運すら賭けて危ないゲームをしていることぐらいは、最初から気づいていた……そう申し上げておりますの」

そう告げたエレナの両目が、スツと細められた。

「我がウッドワード家は騎士の一門。王家に徒為^{あた}す者を見過ごすわけには参りません。クロード・アジャン。サウスゴータ太守の座、ご返上ください。さもないければ、あなたがジークフリード・オブ・ジェリドを買収しようとした書簡が、国王陛下のもとに届けられる手筈になっております」

「なっ……！？」

そうなれば悪魔疑惑が蒸し返される。いや、一度は解決した疑惑だ。次は内々に処理を済ませることになるだろう。少なくとも、ジークフリート・オブ・ジェリドのみを頼る形で処理を進めれば、フエスタ侯を始めとする正竜頭派が介入する余地もない。国王がその手を選ぶ可能性は極めて高いと言える。

「じ、自滅するぞ！！ 秘薬を作ったのはアーサーではないか！？」

「なんのことでしょう？ たかが5歳の子供に【探知】ディテクトマジックを欺ける秘薬が作れると、そうおっしゃるのですか？」

「現に」

と言いかけたところで彼は言葉を失った。

重要なのは“どちらの言い分が信用されるか？”ということところだ。わかりきっている。

いかにアーサーが聡明であろうとも、表向きには、昨年まで床に伏せていた子供にすぎない。ガンダールヴの技を継承しているという話は出ているが、それはあくまで武勇に属するもの。秘薬など知らないと言い張られれば、覆すこともできない。

「もちろん、私が水系魔法を苦手としていることも有名ですわよ？」

その通りだ。エレナは風と火と地のトライアングル。得意なのは風系統。水系統はどうしても身に付かず、正規のスクウェアになれなかったことが知れ渡っている。とても【探知】ディテクトマジックを欺ける秘薬など、生み出せそうにない。

「……クロードお兄様」

エレナはクロードの膝に、自らの手をソツと添え置いた。

「才気に走る気持ちはわかります。ですが……こうした形で、王国の命運をかけることだけはおやめください」

「……まったく、甘さが抜けないのもあいかわらずか」

サウスゴータ侯は溜息をつきながら、右手で目元を覆い隠した。

「おまえはいつもそうだ。私の器の小ささを、嫌が上でも思い知らせてきやがる……どれだけ必死に論理を立てても、おまえはいつも最後の最後で急所を狙いうちしてくる……おまえが男子に生まれてさえいれば」

「それは困りますわ」

エレナは微笑んだ。今度こそ文字通り、瞳にも柔らかい光が浮かんでいる。

「男に生まれていては、ロビンと結婚できませんもの」
「……だろうな」

今度はクロードが微笑む番だった。もちろん、苦笑気味に、だが。

「おまえがそこまでするということは……私の賭けは、分が悪すぎるということか？」

「賭けに出るための体力すら、今のアルビオンにはありませんもの」
「そこまでひどいか」

「少なくともクロードお兄様の案を実施するには、最低でも内乱を一度、対外戦争を一度、勝ち抜いたうえで、ようやくエルフとの交渉に入れる形になりますでしょ？ そんなことが、今のアルビオンに可能だとでも？」

「そうならないように動くつもりだったが……無理か」

「ええ、無理です」

「そうか」

クロードは溜息をつく。

「わかったわかった。私の負けだ」

ようやくクロードは両手をあげた。

「私の7年間は無駄だった。そういうことだろ」

「クロードお兄様は誰かの下で働いてこそ真価を発揮しますもの。上に立とうと背伸びしている時点で、本来の長所が台無しになっただけですわ。あっ　太守の座は返上なさないでくださいね。お兄様以外に教会を牽制できる人材、アルビオンのどこにも見当たらないんですから」

「わかったと言ってるだろ。それ以上言うな。こっちは一世一代の大勝負に負けたばかりなんだぞ」

そう告げる彼の表情は、まるで憑き物が落ちたかのようにサッパリとしていた。

「まったく……大公殿下の義理の父親にさせられるわ、7年越しの計画をろくでもない連中と妹弟子に崩されてしまっわ……最悪にも

ほどがあるだろ」

再びクロードは溜息はついた。

それはひとつの野心^{ほのお}が煙をあげて消え去った瞬間でもあった……

……

INTERLUDE / CLOSE

「……………うわー」

木簡を使った式神 馬車の座席の隙間に潜ませているイモリの姿をした式神 との精神接続を解除した俺は、溜息と共に、そうつぶやくことしかできなかった。

京都神鳴流 式神術。

原作の修学旅行編などで桜咲刹那が使っていたアレは、男爵領で半年以上、神鳴流の稽古を積むことで使えるようになっていた。もっとも、原作のような自律的に動ける式神を作るレベルには達していない。今のところは“ちょっとした訓練を積んだ動物”程度の判断能力しか持たせられないため、使いどころが難しい代物だったりもする。

だが、精神接続で五感を借りられる点は、極めて有用だ。おまけに氣を用いているため、魔法に頼るこの世界のメイジには気づかれ

にくいという利点もある。

一応、系統特性が火系の場合は熱を、風の場合はわずかな気流を敏感に感じ取れるようになるが、元が紙や木簡である式神は熱なんて持ち合わせていないし、隙間でジツとしていれば気流なんて生じるわけもない。

そうした意味で式神術は、この世界において最強に近い諜報手段と言える気がする。

というわけで、実際、どの程度使えるのか試してみたいと思っていた俺は、いい機会だからとサウスゴータ侯と母上の様子を探るべく使ってみたのだが……その結果が、これだ。

「あのサウスゴータ侯が……ねえ」

苦笑いしか出てこない。

後先考えずエルフを恋人にしてしまう大公。
これを権力争いに利用する大貴族たち。
そして

「嘘の手紙で丸め込む母上……さすが“百枚舌”……………」

男爵領からサウスゴータイウムに出発する時、母上はなぜか手紙の束を手荷物に加えていた。それは何なのかと尋ねてみたら、

ふふふ。いざという時、いろいろと使えるのよ？

と言われるだけで、具体的な話は聞くことができなかった。

だが、今ならわかる。

この時代、手紙に消印なんてものはない。つまり中身さえ見せなければ、誰それと連絡をとっていた、なんてことを捏造することも簡単なのだ。おそらく母上は、これを正統認定を受ける際の“手札のひとつ”と考えていたのだろうか……

まさか、こういう形で利用するとは。

恐るべきは“百枚舌”。サウスゴータ侯は、完全に母上に誘導され、手紙の中身が口で言った通りのものと誤解した。

問題は“ガンダールヴの技”についてだが、すでに異端認定回避の布石として、王軍に広めてはどうか、ということをも母上と話し合っている段階だ。父上と同じ武辺者扱いされているジェリド伯なら、まず間違いなく、後から修得を持ちかけても乗ってくるだろうから、つじつまもあわせやすい。

「チートだけじゃ、どうにもならないってことか……」

母上のやり方を見ていて痛感した。

今回、母上はサウスゴータ侯に、事実上の爵位返上を持ちかけるという危険な賭けに討って出ている。普通に考えればリスクが高すぎる追いつめ方だ。だが結果的に、サウスゴータ侯は、それを気にした様子もなく、驚くほど素直に負けを認めてしまった。

それはなぜか。

答えは簡単　母上とサウスゴータ侯が互いの人と為^なりを把握していたから。

もしかするとサウスゴータ侯も、手紙が偽物である可能性に気づいていたのかもしれない。だが、その気になれば母上が言った通りのことを行うだろうと予測したはずだ。これをどうにかするには母上を害するしかないが、そんなことをすれば俺が動くことは必定。ガンダールヴとミヨズニトニルンの技を持つ俺が敵に回った瞬間、部分変装薬が無効化されるであろうことも容易に想像がつく。そうなれば、サウスゴータ侯はお終いだ。つまり今さら母上を害したところで、どうにもならないことになる……

一方、母上はそこまで読まれることを承知で、あえてリスクを侵した可能性も捨てきれない。単に“諦める”と説得しても意味がないと考えたとすれば……だからといって、上策とは言い難いところだが、やはりそこは、あれなんだろう。

対人交渉は効率性だけで推し量れない部分がある。
悪手に思えても、相手によっては最善手になりえる。

チートでどうこうできない部分だ。いや、【無窮の才能】頼りで交渉技術を伸ばそうとすれば、どうにかなるのか？　だがそのためには交渉の経験を積まなければならず……それって、どうすればいいんだ？　商談とか？　いや、それで伸びるのは“利益交渉”の技術だけだろう。母上のような話術を手にいれるには、もっと別の経験が……

「俺ってチートなんだか、そうじゃないんだか……」

やはり天然チートが最強なのかもしれない。

父上もそうだったし、母上もそうらしいし。

まあ、あれだ。

我がウッドワード家は騎士の一門。王家に徒為す者を見過ぐすわけには参りません。

母上は、そう言っていた。

今生の俺もまた、そんなウッドワード家の一員だ。
だとしたら。

「まずは両親が誇れるような、“アーサー・ウッドワード”になりたいよな」

そんなことをつぶやきながら、俺はガリガリと頭をかくのだった。

俺と母上がジャーウッド男爵領への帰路についたのは、その翌日のことだ。

とりあえずサウスゴータ侯は、どこかスッキリとした顔で見送ってくれたのだが……これで本当に悪魔騒動は終わったと言えるのだろうか？ 漠然とした不安を覚えながらも、俺は頭を“これから”のことに切り替えることにした。

「母上。ようやくですね」

「ふふふ。そうね」

領地改革ことジャード男爵領再編計画。今の俺になにがどこまで出来るかわからないが、まあ、やれることからやっつけていこう。

INTERLUDE / SIGHT : サウスゴータ
イウム飛竜籠港

飛びだっていく飛竜籠を見送るサウスゴータ侯は、ふう、と溜息をついた。

「マチルダ。もう行ってしまったぞ？」

振り返りながら隠れている愛娘に声をかけてみる。最後まで馬車の中に隠れていたサウスゴータ侯の愛娘 マチルダは、窓のカーテンを小さく開け、ジッと飛び去っていく飛竜籠を見送り続けた。

（やれやれ……）

サウスゴータ侯としては、溜息をつくしかない。

娘は部分変装薬の真実に気づいている。それもそうだろう。結果的に、マチルダはアーサーを今回の悪魔騒動に巻き込んでしまった張本人だ。そのうえ、表向きには病氣療養としてサウスゴータイウム近郊に逗留していたものの、見舞いに出向くことを父親から禁止

されていたのだ。

（素直に言うことを聞いた時点で妙だと思っていたが……）

今も愛娘は、晩冬の青空を見つめ続けている。

（……うむ）

サウスゴータ侯もまた、同じように飛竜籠が飛び去った先を眺めてみた。

（ティファニア様は無理でも……）

INTERLUDE / CLOSE

「アーサー、寒いのか？」

「い、いえ……なにかこう……嫌な予感が……」

なんだろう。嫌な予感がしまくるんだが……やはり悪魔騒動、終わってないのか？

第10話 見つめる先は（後編）（後書き）

以上で「悪魔騒動編」は終了。

次話からは「魔法学院入学編（仮）」。これまで以上のオリジナル設定、御都合主義、オリキャラ、原作キャラ崩壊が予想されますが、お付き合いいただけましたら幸いです m（――）m

なお、次話は3月13日（日曜日）に更新。以後、「毎週日曜日0時更新」に変わります。ご注意ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4852q/>

オリ設定だらけのアルビオン王国を魔改造

2011年3月10日00時08分発行